民話「靴履き猫」や「動物（怪物）婿」が中国に

鈴木　滿

初めに

十七世紀の末つ方、フランス王国の首都パリで出版された中・上流階級の令嬢向けにシャルル・ペローが編んだ教訓付き物語集『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』、またの名『鵞鳥おばさんのお伽話』に収められた「猫先生または長靴を履いた牡猫（おねこ）」の素材となった民話は、それまで既に広汎にヨーロッパに流布していた、と思われ、この種の民話の分析は十九世紀以降もっぱらヨーロッパ文化の見地に立って行われている。しかし、十七世紀初頭の中国、明代末期の白話（はくわ）小説集『醒世恒言（シンシィハンイェン）』（醒世恒言（せいせいこうげん））巻三十五「徐老僕義憤成家」とその素材となった逸話が、こうしたヨーロッパの民話や、それを素材とした物語とまさに同工異曲であることに着目して、こちらの方の観点で見直すと、ヨーロッパでの平均的解釈とは異なっているが、これこそこの型の民話の核心に他ならぬ、と納得できるテーマがくっきり浮かび上がる。また、やはり十七世紀、それも三十年代、（政治的に四分五

裂の）イタリア半島でも一風変わった言語・風俗を持っていた大都市ナポリの文人ジャンバッティスタ・バジーレ[1]の編んだナポリ方言の物語集『お話の中のお話（お話の白眉）』、通称『五日物語』収録の一話「蛇」の素材である動物（怪物）婿型民話と同類項の導入部を持つ物語が、十世紀の中国、北宋初期成立の文言小説集成『太平広記』（太平広記）に見出される。これはまた明末の白話小説集『喩世明言』（喩世明言）巻三十三「張古老種瓜娶文女」の題材に用いられ、大いに脚色される。九世紀唐の高級官僚段成式（段成式）撰の大博物誌・異事奇譚集成『酉陽雑俎』（酉陽雑俎）に採録されている「葉限」（葉限）が世界最古の完璧な「シンデレラ」文献であることは、稀有な博物学者にして民俗学者南方熊楠（一八六七―一九四一）の指摘[2]以来、夙に汎く江湖に知られている――さよう、欧米の口承文芸研究者にあっても常識ですな――が、民話「靴履き猫」や「動物（怪物）婿」の東西比較論としての小論は、疎漏の譏りを免れ得ないとしても、この分野においてまずまず嚆矢であろうか。

Ⅰ　民話「靴履き猫」と明の田汝成「阿寄伝」

〔一〕

民話「長靴を履いたにゃんこ」

ヨーロッパで、民話（昔話）「長靴を履いた牡猫」として定着、民話の話型 type of folktale としてはATU五四五B「長靴を履いたにゃんこ」*Puss in Boots*[4]に分類され、動物援助譚の一つとされているのはこんな粗筋[5]。なお、以下の文中における〔　　〕内は論者の補足である。

ある動物（猫、狐、ジャッカル、[6] 猿など[7]）が（義務からではなく）ある貧乏な男が（王女と結婚することによって）金持ちになるのを助けよう、と思う。皇帝〔王〕の信任を得るため、この動物は皇帝に、その貧乏な男が大層富裕だ、と告げる。この貧相な身なりの未来の花婿が花嫁の宮殿へ赴く途中、動物は、事故が起こって〔追剥に遭って〕、花婿の衣服（馬たち、婚礼の贈り物、婚礼の賓客たち）が悉く失われたふりをする。そこで王〔皇帝〕は貧乏な男に上等の衣服を与え、婿君として受け入れる。

男が自分の財産を披露しなければならなくなると、動物は男に先行、牧人や農夫らに、彼らの畜群や耕作地が貧乏な男のものだ、と言うよう強制する。動物はそれらの財産の本当の持ち主である魔物（龍（ドラゴン）、人喰い鬼（オウガ）、巨人（ジャイアント）、魔女（ウィッチ）、魔法使い（マジシャン））を、焼き殺したり、押し潰したり、撃ち殺したり、あるいは計略に掛けて殺す。花嫁が供揃いを従えて到着すると、婿殿はそれらの財産の本当の持ち主として立ち現れる。

動物は死んだふりをして貧乏な男の感謝の念を試す（頭を切り落とされると人間になる[8]）。幾つかの類話では男は恩知らずにふるまう。あるいは、自分がした約束を守らない。

〔兄弟の財産分けと末弟に一見最も価値のないものが押しつけられる、というモティーフは、右の粗筋では全く閑却されている。これから挙げる類話、それも代表的なヨーロッパの類話ではいずれもこのモティーフが導入部に採用されているにも拘わらず。遺憾ながらこのことはＡＴＵの大きな誤謬である。なお、右に指摘されているように、主人を助ける動物は猫とは限らないので、分析する場合、「猫」に捉われないよう留意すべきだろう。むしろジャッカルや猿が活躍する類話があることに注目したい。これらが活躍する話はヨーロッパ種とは言い難い――ジャッカルの場合は、これがインドや中近東以外に棲息する南東ヨーロッパのものということはあり得るが――から、この民話の伝播を考える上興味深いのである〕。

〔二〕

この民話を素材として物語に仕立てたものとして、ヨーロッパで挙げられる刊本は以下のごとくである。

① 十六世紀のイタリア

ヴェネツィア共和国の文人ジョヴァンニ・フランチェスコ・ストラパローラ（一四八〇頃―一五五八頃）作『楽しき夜夜』（一五五〇―五四）Giovanni Francesco Strapalora: *Le piacevoli notti* の全十三夜に亘る物語のうち第十一夜第一話「コンスタンティーノの物語」。[9]

パン屋（?）の貧しい後家さんが三人の息子たちに、遺産として、パン生地を捏ねる捏桶、パン籠、それから猫[10]を残す。末息子コンスタンティーノ Constantino に与えられた猫は、兎を何匹も捕まえて、王のところに持って行き、これを、主人からでございます、と言って献上。

猫は頃合を見てコンスタンティーノを呼び出し、水に投げ込み、溺れたふりをしなさい、と言い付け、通りかかった王に着替えをもらう。王は、りっぱな風采になった若者が大いに気に入り、王女と結婚させる。〔もとより、大貴族だ、と誤解しているわけ〕。

婚礼が済むと王は、婿殿の領地と領民を見たい、と希望。猫はすぐさま先立ちになり、途中で出会った騎馬の男たち、牧夫たち、城の召使たちを脅し、わたしどもはコンスタンティーノ様の家来でございます、と王に言わせるよう計らう。王は満足する。

幸運にも本当の領主であるヴァレンティーノ Valentino は外出中で、出先で突然死んでしまい、城に戻って来ない。〔こうした解決は、申すまでもないが、あまりにもご都合主義でおもしろくない〕。

この猫は明らかに仙女[11]なのだが、主人に幸運を齎してやったあと、これについては何も語られない〔という結びで終わる〕。

② 十七世紀のイタリア

多年ヴェネツィア共和国に軍人として勤務（従って、中近東とこの貿易都市国家を結ぶ交流の道、アドリア海、イオニア海、東地中海、エーゲ海とその沿岸地域、そこに浮かぶ島島の風物・文化、ひいては口承文芸などに触れる機会が少なくなかったことであろう）し、のち故郷ナポリで行政官となった、文人ジャンバッティスタ・バジーレ（一五七五―一六三二）がナポリ方言で記した『お話の中のお話』（通称『五日物語（イル・ペンタメローネ）』）（一六三四―三六）Giambattista Basile: *Lo cunto delli cunti* (*Il Pentamerone*) の全五日（一日当たり十話）に亘る物語のうち第二日第四話「ガッリウーゾ」[12]。

乞食の老人[13]が二人の息子に、遺産として僅かに篩（ふるい）と猫[14]を残す。下の息子ガッリウーゾ Gagliuso が猫をもらう。猫は主人を憐れんで、せっせと魚や野鳥を捕まえ、そうした獲物を王のところに持参、ガッリウーゾ殿（シニョーレ） Signore Gagliuso の贈り物でございます、と告げる。

王が、この未知の親切な貴族と知り合いになりたい、と猫に言うと、猫が答えていわく。主人の従僕どもが昨夜主人の許から出奔つかまつり、ついでに主人の衣服を洗いざらい持ち逃げいたしました、と。そこで王は衣装

を送り届け、宮廷にやって来たガッリウーゾを善美を尽くしてもてなす。この際ガッリウーゾが野卑な本性を現してしまいそうになるのを、猫が口早に言い訳をして助け舟を出す。

王は間もなく、ガッリウーゾが、所有している、と自称する財産を実地に知りたい、と思い、調べ役の使者を出す。けれども猫は使者に先行し、耕牧地にいる全ての牧人に、その辺の羊・牛・馬の群がガッリウーゾ殿の所有物だ、と言わせることに成功。そこで王女とガッリウーゾの結婚が行われる。王女は莫大な持参金を持って来る。

ガッリウーゾは豊かになったので、土地を買い込んで大地主になる。そして猫に厳かに約束する。生きている間はきちんと面倒を見、死んだら樹脂溶液で保存処置して、黄金の柩（ひつぎ）に納めよう、と。

さて、暫くして猫は死んだふりをする。するとすぐさまガッリウーゾは猫の脚をつかんで窓から外へ放り出す。死んだ、と思われていた猫はむっくりと起き上がり、恩知らずなガッリウーゾを罵倒して、どこへともなく立ち去る。

③　十七世紀末のフランス

ルイ十四世に仕えたパリ在住の官僚・学者（フランス学士院（アカデミー・フランセーズ）会員）・文人シャルル・ペロー（一六二八―一七〇三）作『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』またの名『鵞鳥おばさんのお伽話』（一六九七）Charles Perrault: *Histoires ou Contes du temps passé. Avec des Moralitéz* (=*Moralités*)/*Contes de ma mère l'Oye* (=*l'Oie*) に収められた韻文三編、散文八編のうち散文の「猫先生または長靴を履いた牡猫」[15] Le Maître Chat ou le Chat botté。[16] ペローはこの「お伽話集」の多くを民間に伝えられた話を材料として編んだ、とされている。従っ

て、これもペローの創作ではなく、民話を素材とした物語、と考えるのが至当である。

臨終の粉挽きが三人の息子に遺産として、水車小屋と驢馬と牡猫[18]を残す。末息子は猫をもらう。

こいつの肉を食べて、[19]毛皮で手套（マフ）でも作ればそれでおしまい、と嘆く三男坊に、猫は泰然自若として「藪の中に入って行けるような」長靴（ボト）を一足作らせてくれ、それから袋を一つ、と頼む。

猫は長靴を履き、袋を使って野鳥や兎を獲っては、王の許に持参、主人のカラバ侯爵[20]からの献上品でございます、と言う。これが続く。

仲介役の猫のお蔭で、王はこの未知の大貴族に好意を持つ。そうした頃合に猫は、王が王女とともに川辺へ散策に出かけることを聞きつける。

猫の勧めで、主人の若者は裸になって川に入っている。王一行が通りかかると、猫は、カラバ侯爵が溺れている、助けてくれ、とどなる。若者が川から引き上げられると、猫は更に、侯爵の衣服が全て盗まれた、と王に告げる。着替えた若者はもともと器量が好かったので、りっぱな風采になる。王女は彼に恋をする。

主人の若者が王の馬車に乗ると、猫は先立ちになる。牧場で牧草を刈っている者たち、畑で麦を収穫している者たちなどに向かって、王に、この領地がカラバ侯爵の所有だ、と言わないと、ずったずたにしてしまうぞ、と脅す。やがて王がやって来ると、怖がった農民がその通りに答えるので、王はカラバ侯爵の富裕なのにすっかり感心する。

実はこれらの領地はある人喰い鬼（オーグル）[21]のもの。やがて鬼の城に到着した猫は鄭重に鬼にお目通りを願い、鬼から親切に歓迎される。猫は鬼の変身術を讃え、ライオンに化けてもらう。次いで鬼が二十日鼠になったところをぱっ

くり食べてしまう。[22]

城まで来た王一行を城門に出迎えた猫は、カラバ侯爵の城へようこそ、と挨拶する。王は「侯爵」の人柄とその莫大な財産が気に入り、王女と結婚させる。猫は大貴族になる。

④　十九世紀初めのドイツ

いわゆる『グリム童話集』、正式名称『グリム兄弟の子どもと家庭のための昔話集』*Kinder und Hausmärchen der Brüder Grimm*（=Jacob und Wilhelm Grimm）（略称ＫＨＭ）初版第一部（一八一二）に三三番「長靴を履いた牡猫」Der gestiefelte Kater として収録。カッセルの名家ハッセンプフルーク家の次女ヨハンナ（愛称ジャネット）によって一八一二年秋、兄弟に語られたもの。「カラバ侯爵」ではなくただ「伯爵」Graf となっている（民話には本来固有名詞は不要なのでこれでよい）こと、「人喰い鬼」ではなく「魔法使い」Zauberer になっている（「人喰い鬼」はドイツ語圏には存在しないのでこれでよい）ほかはほとんどペローのそれと同じ。それゆえ、ＫＨＭ第二版以降は削除された（もっともさまざまな脚色がなされており、語り口もより民衆的で、論者はかねてから、こちらの方がずっとおもしろい、と考えている）。ハッセンプフルーク家の夫人はルイ十四世時代に迫害されてフランス王国から亡命して来た新教徒の子孫で、この家庭では日常フランス語が話されていた。ジャネットとしては、多分幼時に読み聞かされでもしたペローの物語を無意識に自分なりのものに仕上げて、妹の友だちドルトヒェン（ドロテーア・グリム）の兄様たちで、民話を熱心に蒐集しているグリム兄弟の熱望に応えたものか。

〔三〕

猫と長靴の分析

この話型で活躍する猫は一体何なのか。また、猫は牡・牝いずれかでなくてはならないのか。ペローのお伽話（コント）で出て来る小道具の「長靴（ボト）」botteとは何か。できるだけヨーロッパ文化の素地に立つよう努めながら、仮説を立ててみる。

ⅰ　猫は何なのか。

家の精、家の守護神であろう。古代ローマのゲニウス・ロキ、[23] ペナテス、[24] あるいはラレス、[25] ドイツ語圏のコーボルト、[26] ハインツェルメンヒェン、[27] スコットランドのブラウニー、[28] フランスの幾つかの地方におけるフォレ、[29] 日本の東北地方の座敷童子（ざしきわらし）の類なのだ。[30] また、古代ローマで大いに崇敬されたウェスタ（竈の女神）[31] の名残かも知れない。猫と竈は極めて関係が深いではないか。

ⅱ　猫の性（セックス）はいかにあるべきか。

元来は牡・牝どちらでも構わなかったのだろう。家の守護神という役割から言えば、どちらでもよいはず。日本昔話にある猫の報恩譚（「猫の恩返し」）に登場する猫は必ず古猫ではあるが、牡・牝どちらとも規定されていないのがほとんど（また、色も一定していない）。名詞に文法上の性のある言語での物語だと、文法上の性がたまたま女性だから猫の自然性も牝、たまたま男性だから牡、と決めつけては妙になる、[32] と思われる。

ただしペローでは、「猫先生」といった具合にわざわざ牡と規定されているのはおもしろい。これは長靴を履く以上男性でなければならなかったからである。

iii　長靴という小道具の役割は何か。

ヤーコプ・グリム[33]はその著書『ドイツ神話学』の中で、この猫がコーボルト、家の精であろう、との前提に立ち、更にその履く靴は小人や巨人が履く哩（マイル）長靴[34]ではないか、と類推している[35]。つまり、猫はこの道具のお蔭で、猛烈な速さで猟鳥・猟獣を駆り立てて捕獲したり、王様の行列の先立ちとして駆け回り、自分が保護する若者を大領主に見せかけるさまざまな必要措置を講じることができたのだ、というしだい。

猫の長靴が哩長靴ではないか、とのこの説〔いささか考え過ぎではないか、と存ずるが〕の当否はひとまず措いて、論者の仮説を述べておこう。

十七世紀フランスや英国の陸軍兵士、騎乗の旅行者、軍人貴族（法官貴族、つまり文事に通じていて官吏として才幹を発揮したため貴族の称号を得た、司法畑などで立身した人人は異なろう）は腿の上部まで覆う分厚い皮革製の長靴を履いた（もちろん拍車も付けている）。堂上貴族が王宮に参内する折は、踵（ヒール）の高い優雅な短靴（その場合の交通手段は馬車、あるいは、二人の屈強な男が両手で握る腕木に載せられた椅子輿（こし））だが、戦闘や旅行の際はもちろんのこと、都市の街路（ともすると泥濘（でいねい）・汚物が積もっている）での歩行でさえ、長靴でなければしばしば動きが取れないし、乗馬する場合はとりわけ長靴を履いて着衣と脚部を保護しなければならなかった。また、騎馬での戦闘では、腿の上部まで覆う長靴は、剣の斬撃・槍での刺突からある程度、または十全に脚部を守ってくれもする。それゆえ「長靴を履いた牡猫」のスタイルは、陸軍兵士、あるいは大貴族の護衛、あるいは軍人貴族のそれなのであって、さる大貴族の家臣でございます、と名乗って王様の許に伺候するのにも相応しく、人喰い鬼のおとなしやかな領民を凄みを効かせて脅しつけるのにも好都合なのである。一つにはルイ十四世の絶対王政下にあったフランスなるがゆえの長靴モティーフということが考えられるのではあるまいか。

さてさてつらつら惟（おも）んみるに、猫に、それも端倪（たんげい）すべからざる才覚と実行力を持つ牡猫に、長靴を履かせたのはペローの独創[36]——さよう、なんとも素晴らしい独創ではあるが、独創は独創——ではないか、という気がしてくる。されど、であるとすれば、猫の履いている長靴を民間伝承のモティーフとして徒にあなぐり詮索することは無意味に近かろう。

因みに、十九世紀フランスにあってロマン派の挿絵画家・版画家として名声を轟かせたポール・ギュスターヴ・ドレ Paul Gustave Doré（一八三二—八三）はこの物語に四つの挿絵を描いている（一八六七）が、そのうち、若い主人を裸にして水に入れ、王の馬車が近づいたのを見澄まし、爪を剥き出しにした両の前脚を高く掲げ、形相凄まじく仁王立ちで助けを呼ぶ状景の牡猫は、十七世紀フランス王国の銃士（ムスケテール）（近衛乗馬歩兵）さながらの扮装で、羽根飾りの付いた鍔広帽を被り、短いマントを翻し、大きな留め金（バックル）の付いた頑丈な革帯を締め、深い長靴を履いている。この図柄はけだしペローの意を体し、神髄を見事に突いている、と思える。（ただし、猫先生、長剣や短剣、銃、短銃などの武器は帯びていない。革帯に括りつけた袋は携行糧食入れらしく、そこは猫のことゆえ大鼠が納められており、これが首を突き出して、袋の破れから尻尾がだらり。更に革帯から小鼠が一匹紐でぶら下がっているのはご愛嬌である。鼠公の大きさに鑑みるに、猫は通常の人間と同等の大きさ。これはそれでよろしい。分からないのはマントを頸に止めている鎖状の代物で、これは鼠の頭をずらりと並べているように見える。『西遊記』の沙悟浄は三蔵法師に帰依する前には流沙河（りゅうさが）で喰らった人間の九個の髑髏（どくろ）を頸の周りに掛けていたが、これと同様の記念品なのだろうか）。

次ページ図参照。

ギュスターヴ・ドレ描く『長靴を履いた牡猫』挿絵「王の鹵簿（ろぼ）に助けを求める牡猫」

「助けてくれえ、助けてくれえ。ああ、カラバ侯爵様が溺れちゃうよう」Au secours, au secours, voilà Monsieur le marquis de Carabas qui se noie（=noye）.

〔四〕

さて、中国では。

① 中国のいわゆる「三言」[37]の一つに、三人兄弟の財産分け、「役立たず」を与えられた末の者の嘆き、その「役立たず」の働きにより主家が大いに豊かになる、という物語がある。すなわち、『醒世恒言』巻三十五「徐老僕義憤成家（徐の老僕義憤して家を成す）」[38]の本話である。粗筋はざっと以下の通り。[39]

明の嘉靖年間（一五二二―六六）、浙江省厳州府淳安県に、徐言、徐召、徐哲という三兄弟がいた。彼らは父親の遺命にしたがって同居していた。この百姓家には、一頭の牛、一頭の馬、そして、両親の葬式代のために身売りして長年働いてきた、阿寄〔寄どん、寄やん、寄ちゃん、くらいの意〕[40]という五十歳余りの老僕がいた。[41]

ある時、一番の子だくさんだった徐哲が病死し、妻の顔氏と、まだ幼い二男三女が残された。徐哲の遺族の面倒を看るのを嫌った徐言と徐召は、財産を三分割して、体よく彼らの世話を放棄してしまうことにする。田畑と家屋敷を分割したほかは、徐言は耕作用の牛を、徐召は乗馬用の馬を取り、顔氏の一家には阿寄〔とその妻子。子はまだ十歳の少年〕が押しつけられる。

顔氏は、役立たずを押しつけられた、と嘆くが、阿寄は「牛馬ではせいぜい〔銀〕数両[42]の得にしかなりませんが、私はあなた様の財産を元手に商売をして、一年で数倍にできますよ」と豪語する。彼はこれまで商売などしたことはなく、顔氏も阿寄の妻も半信半疑、徐言や徐召はせせら嗤（わら）うが、それをよそに、阿寄は顔氏のなけなし

の資金僅か十二両を持って旅立つ。

阿寄は、まず漆の仲介人（牙行・牙人）に自分を売り込んで、首尾よく漆を手に入れる。行商先としてあえて遠方を選んで稼ぎを上げたり、杭州の旱魃（かんばつ）に乗じて米の売買で儲けたりするなどして、順調に金を稼いで行く。

いったん顔氏の許に戻った阿寄は、商売がうまく捗っていることを告げる。顔氏は喜ぶが、阿寄が用心のために金を漆の仲介人に預けており、現金を持っていなかったことから、徐言や徐召は、阿寄はほらを吹いているだけなのではないか、と疑う。

阿寄はその後も儲け続け、二千金〔明代以降は銀二千両を指す〕余りを稼いだところで顔氏の許に帰る。彼は、徐言や徐召には、それほど儲からなかった、と言っておき、彼らに隠れて百姓家付きの広い田畑を買い入れ、顔氏一家をそちらに移らせる。徐言と徐召が真相を知った時には、後の祭であった。

阿寄は二人の息子たちのために先生を頼んで勉強させ、長男に徐寛、次男に徐宏と名も定める。

阿寄は更に漆売りの他に手広く商取引に従事、顔氏一家はますます裕福になる。田地が増えるとともに課役が煩重になったので、阿寄は徐寛・徐宏兄弟に監生[43]の資格を買ってやり、いくらかは課役が軽くなるようにした。やがて、子どもたち全員の結婚の面倒も見た。十年ほど経つと、顔氏は阿寄を家に留めて、まるで尊属のように扱ったが、阿寄自身はまったく私心を見せず、常に使用人として謙虚な姿勢を崩さなかった。八十歳を過ぎて病気になると、医者も薬も断って大往生を遂げたが、顔氏母子は彼を鄭重に葬ることにする。

しかし、徐言と徐召は、阿寄は自分のためにこっそり金を溜め込んでいたに違いない、と邪推し、徐寛・徐宏ら甥たちをそそのかして、一緒に阿寄やその息子の部屋を家捜しする。だが、出て来たのは、ほんの数着の古着や、僅かな小銭、顔氏がかつて阿寄の息子の嫁取りの時に援助した銀三両の余り二両足らずだけ。今更ながら阿

寄の私心の無さに感動し、恥じ入りもした顔氏の息子らはこれを母に打ち明け、一家は阿寄のために一族同様の立派な葬儀を営み、新たに作った徐家の墓所の傍に埋葬した。

また、徐寛兄弟は、阿寄の恩に報いるため、千金〔銀千両〕余を分け与え、その妻子を一家として独立させた。[44] 阿寄の噂は朝廷にまで届き、彼の節義を表彰するために坊が建てられた。[46] その後、徐家〔顔氏の息子たちの系統である徐氏の家系〕も阿寄の子孫も繁栄した、とのことである。

② 右の原型とおぼしき逸話の一つにこんなものがある。明の趙善政[46]著すところの『賓退録』巻三から全文を挙げておく。[47] なお、旧字は新字に変えた。

徐氏昆弟析産，伯取馬，仲取牛，季早死，惟婦与幼子二人，乃以一老僕名阿寄者与之。佯好謂之曰：『弟婦年少，当得老人作伴，牛馬無所用也。』婦泣且詈，謂：『此老僕何益？』阿寄慨然曰：『主母豈謂我不及一牛馬？』乃画策請為主営生。婦典得十二金与之。寄入山販漆，期年而獲息数倍。比十年，累産巨万。為婦嫁三女：婚二子，又延師教二子，輸粟為太学生。且死，出二籍，鉅細悉均分之，曰：『以此遺二郎。』且謂徐婦：『老僕牛馬之報，力已尽矣！』蓋死之日，篋無一金云。

読み下しにしてみる。

徐氏の昆弟産を析す。[48] 伯は馬を取り、仲は牛を取れり。季は早く死して、惟婦と幼子二人のみ。乃ち一老僕の

名阿寄なる者を以て之に与う。佯好して之に謂いて曰く「弟婦年少ければ、当に老人を得て伴と作すべし。牛馬は用うる所無からん」と。婦泣き且つ詈りて、謂う「此の老僕何の益あらんや」と。阿寄慨然として曰く「主母豈我の一牛馬に及ばずと謂うや」と。乃ち画策して主の為に生を営まんことを請う。婦典して十二金を得て之を与う。寄山に入りて漆を販し、期年にして息数倍を獲たり。比するに十年、産を累ぬること巨万。婦の為に三女を嫁し、二子を婚す。又師を延きて二子に教え、粟を輸して太学生と為せり。死に且くして、二籍を出だす。鉅細悉く之を均分せり。曰く「此を以て二郎に遺さん」と。且つ徐婦に謂う「老僕牛馬の報い、力已に尽けり」と。蓋し死するの日、篋に一金無し、と云う。

試みに訳せばこうもあろうか。

徐家の兄弟が財産分けをした。長男は馬を取り、次男は牛を取った。三男は早死にして、妻と幼い息子二人しかいなかった〔後に出るように娘も三人いたのだが〕。そこで〔長男と次男は〕阿寄という名の老下僕一人を与えた。〔長男と次男は〕親切ごかしでこれ〔＝三男の妻〕に言ったもの。「あんたは若いんだから、年寄りを引き取ってお供にするのが丁度いいんで、牛や馬は要らんだろうて」と。妻は泣き、かつ愚痴を並べ、こう言った。「こんな年取ったしもべでは何の役にも立たないわ」と。阿寄は憤懣に耐えない様子で「奥様、このわたしめが牛一頭馬一頭に劣るなどということがどうしてありましょうか」と応え、考えを廻らして主のために生計を立てることを許してくれるよう頼んだ。三男の妻は質を置いて銀十二両を手に入れ、それを阿寄に与えた。阿寄は山に入って漆を仕入れて売り捌き、まる一年で数倍の利得を得た。続けて十年、どんどん財産を増やし、それは

数え切れないほどになった。三男の妻のために、三人の娘を嫁がせ、二人の息子に妻を娶らせた。また教師を招いて二人の息子に学問を修めさせ、〔更に〕金を官庫に納めて太学の学生にしてやった。[49] 死が近づくと、二枚の書き付けを取り出した。〔そこには財産一切が〕細大洩らさず全て均等に分けてあった。そして「これを若旦那お二人に遺します」と言った。また三男の妻に向かって「この老いぼれの召使、牛馬のように務めてご恩に報いましたが、力はすでに尽き果ててしまいました」と告げた。なにしろ臨終の日、〔阿寄の身の回りの品を入れた〕小箱には銀一両すら入っていなかったのだ〔訓読で慣例に従い「と云う」とした原文「云」は文の内容を纏め結ぶ文末の語気助詞。「…と言った」の意味はない〕。

③　更にまた一つ。これも右と同工異曲。明の田汝成[50]の記すところの「阿寄伝」〔『明史』巻二百九十七孝義伝にも採録された〕である。原文[51]をまず次に挙げる。なお、旧字は新字に変えた。

阿寄者，淳安徐氏僕也。徐氏昆弟，別産[52]而居。伯得一馬，仲得一牛，季寡婦，得阿寄。阿寄年五十余矣。[53] 寡婦泣曰：『馬即乗，牛即耕，踉蹌老僕，迺費我藜羹。』阿寄嘆曰：『噫！[54]主謂我力不若牛馬耶？』迺画策営生，示可用状。寡婦悉簪珥属，[55] 得銀一十二両，[56] 畀寄。寄則入山販漆，期年而三其息。[57] 謂寡婦曰：『主無憂，富可立致矣！』[58] 又二十年，而致産数万金。[59] 為寡婦嫁三女，婚両郎，齎聘皆千金；又延師教両郎，既皆輸粟為太学生，[60] 而寡婦則阜然財雄一邑矣。[61] 頃之，阿寄病且死，[62] 謂寡婦曰：『老奴馬牛之報尽矣！』出枕中二楮，[63] 則家計鉅細，[64] 悉均分之，曰：『以之遺両郎君，可世守也。』[67] 言訖而終。徐氏諸孫或疑寄私蓄者，[65] 窃啓其篋，無寸糸粒粟之儲焉，[66] 一嫗一児，僅敝縕掩体而已。嗚呼！阿寄之事，予蓋聞之兪鳴和云。（中略）。嗚和又曰：『阿寄老矣，見徐氏之族，雖幼必拜，[68] 騎

而遇諸塗，必控勒将数百武，以為常。見主母不睇視，女使雖幼，非伝言，不離立也。』（後略）。

読み下しにしてみる。

阿寄は淳安の徐氏の僕なり。徐氏の昆弟、産を別けて居す。伯は一馬を得、仲は一牛を得、季の寡婦は阿寄を得たり。阿寄は年五十余。寡婦泣きて曰く「馬は即ち乗り、牛は即ち耕す。踉蹌たる老僕は迺ち我が藜羹を費やす」と。阿寄嘆じて曰く「噫、主は我が力の牛馬にしかずと謂うや」と。迺ち生を営んで用うべき状を示さんと画策す。寡婦簪珥の属を悉くし、銀一十二両を得、寄に畀う。寄則ち山に入りて漆を販し、期年にして其息を三にす。寡婦に謂いて曰く「主憂うる無かれ。富立に致るべし」と。又二十年、而して産数万金に致る。寡婦の為に三女を嫁がせ、両郎を婚せしめ、聘を齎すこと皆千金。又師を延きて両郎に教え、既に皆粟を輸して太学生と為す。而して寡婦則ち皁然として財一邑に雄たり。頃之、阿寄病みて死に且し。寡婦に謂いて曰く「老奴馬牛の報い尽けり」と。枕中より二楮を出だす。則ち家計の鉅細、悉く之を均分せり。曰く「之を以て両郎君に遺す。世守るべし」と。言訖わりて終わる。徐氏の諸孫或いは寄の私かに蓄うるを疑い、窃かに其の篋を啓くに、寸糸粒粟の儲無し。一嫗一児、僅かに敝縕の体を掩えるのみ。嗚呼、阿寄の事、予蓋し之を兪鳴和の云えるに聞く。（中略）。鳴和又曰く「阿寄老いたり。徐氏の族を見れば、幼なりと雖も必ず拝し、騎して諸塗に遇えば、必ず勒を控ゆること数百武に将し。以て常と為す。主母を見るに睇視せず、女の使するに幼なりと雖も、言を伝うるに非ざれば、離立せず」と。（後略）。

訳はまずこんなところか。

阿寄は淳安の徐家の下僕である。徐家の兄弟は財産を分けて住むことにした。長男は一頭の馬を、次男は一頭の牛を、三男の後家は阿寄を取ることになった。阿寄は年齢五十余りだったので、後家は泣きながら言った。「馬なら乗れるし、牛なら耕せるけど、よぼよぼの老僕なんて、うちの貧弱な食糧を食い潰すだけだわ」。阿寄は溜め息をついて言った。「ああ、奥様は、私の力が牛馬に及ばない、とおっしゃるのですか」。そして（阿寄は）、主のために生計を立てて自分が有用なことを示そう、と考えを廻らした。後家は簪（かんざし）や耳飾りのたぐいを全て出して、銀十二両を手に入れ、阿寄に与えた。阿寄はすぐに山に入って漆を仕入れて売り捌き、まる一年で利得を三倍にして、後家に言った。「奥様、お案じめされるな。富はすぐに手に入れることができますから」。更に二十年で、数万金（銀数万両）の財産を手に入れた。後家のために三人の娘を嫁がせ、二人の若旦那に嫁取りをさせたが、結納金は全て千金だった。また、教師を招いて二人の若旦那に学問を修めさせ、そのままどちらも金を使って太学の学生にしてやった。後家は大いに豊かになり、その財産は村で傑出したものとなった。しばらくして、阿寄は病気になり、死に臨んで、後家に言った。「この老いぼれ下男の牛馬の労苦もこれでおしまいでございます」。枕の中から二枚の書き付けを出した。すなわち、〔そこには〕家産を細大洩らさず全て均等に分けてあった。そしてこう言った。「これをお二人の若旦那に遺します。代代守ってくださいませ」。そう言い終って亡くなった。徐家の〔二人の息子らの〕子孫たちの中に、阿寄がこっそり貯めこんでいたのではないか、と考えた者がいて、ひそかに阿寄の小箱を開けてみたが、糸一寸、粟一粒ほどの蓄えもなく、妻と一人息子は、屑麻で織ったぼろぼろの衣服を身に纏っているだけだった。〔以下は田汝成の感慨である〕。ああ、阿寄の事だが、わた

しはこれを兪鳴和[70]の話で聞いたのだ。（中略）。鳴和はまたこう言った。[71]「阿寄は歳を取った。〔が〕、徐氏の一族を見れば、幼い者でも必ず鄭重に挨拶し、馬に乗っての道すがら行き逢うことがあると、必ず下馬して手綱を控えて長いこと佇立して遣り過ごした。これがいつものことだった。奥様に会う場合は横目で見るようなことはなく〔きちんと正視し〕、（徐家の）女性が使いに来た時は、相手が幼くても〔敬意を示して〕、伝言を頼むのでなければ、並び立つことはしなかった」と。（後略）。

馮夢龍編著のいわゆる「三言」と凌濛初著すいわゆる「二拍」[72]の五書収録の物語合計二百編のうちから代表的な四十編を選んだ抱甕老人編[73]『今古奇観』にも第二十五話として「徐老僕義憤成家」が入っている。これは『醒世恒言』のそれとほぼ同じではあるが、細部に異なりはある。

中華民国の伯英編『曲海総目提要拾遺』によれば、曲「万倍利」はこれを素材にしている由。

〔五〕

比較分析

ヨーロッパにあっては、本格昔話である魔法昔話とも言えば言えよう（実際はペローの物語で人喰い鬼が魔法で変身する程度ではあるが）形式を取った内容を、実人生に即した逸話、ないし短編小説にすると、こうした中国版になる。論者が先に、さよう、あえて申せば、ことさらにあげつらったことどもは、なるほど、まずまずヨーロッパ文化・文明を踏まえての上ではあったが、さてさて、どんなものだろうか。すなわち、この話型で活躍する猫は一体何なのか、また、猫は牡・牝いずれかでなくてはならないのか、ペローのお伽話で出て来る小道具の「長靴」

は何か、こうした数数の疑問はこちらでは何の関わりもないわけである。となると、この話型を論ずる上ではしかつめらしく思案するほどの価値はないかも知れない。

冒頭に訳出したＡＴＵによるこの話型の粗筋では、兄弟の財産分けなるモティーフが全く閑却されている。ヨーロッパの文献にあるとして論者が挙げた三つの物語ではいずれもこれがきちんと記されているにも拘わらず。三つの物語で猫が大活躍に及ぶ動機は、末子に対する同情の念に他ならない。そうした事情がなければ、なにしろ猫なのだから、日向か炉辺で眠りこけていたか、せいぜいで鼠退治（それも趣味と実益を兼ねてのこと）に励んだくらいだろうが。そして中国版では、主家の不公平な財産分けに老下男が義憤を感じ、奴隷という身分柄、それまで別に能を顕さなかったのに、大いに金儲けの異才を示す。東西等しくこれこそこの話型の眼目であることが理解できよう。

更に一言。ＡＴＵの粗筋では最後にこう記されている。「幾つかの類話では男は恩知らずにふるまう。あるいは、自分がした約束を守らない」。そして事実、『五日物語（イル・ペンタメローネ）』の第二日第四話「ガッリウーゾ」ではそうなっている。この点明の田汝成の記すところの「阿寄伝」でも同じ。すなわち「徐氏の諸孫或いは寄の私（ひそ）かに蓄うるを疑い、窃（ひそ）かに其の篋を啓（ひら）くに、寸糸粒粟の儲（ちょ）無し。一嫗（おん）一児、僅かに敝緼（へいうん）の体を掩えるのみ」と。大金持ちにしてもらった徐家の人人は、忠僕阿寄の多少の蓄財さえ許そうとせず、あさましくも故人の身辺の捜索をあえて行い、しかも阿寄の身寄りであるその老妻とその子を貧困のどん底にほったらかしにしていたのである。東西の物語の一部に一致するこうした忘恩の所業もこの話型の重要なモティーフと考えるべきかも知れない。

論者は彼我の相関関係を解明するつもりはない。いや、有り体に申せば、それだけの資料を全く持たない。ただ、これらの共通の源があるとすれば、インドに求められるかも知れない、と甚だ杜撰ではあるが推測する。

もし、そうなら、と更に空想を拡げれば、中国へは仏典のうち寓話を扱ったもの、即ち「譬喩経」のたぐいで伝播したのかも。今のところ、何も発見はないが。

なお、『阿寄伝』では知友からの伝聞を基にした、となっている。具体的に「兪鳴和」という人名を挙げているから、田汝成がこれから聞いた、というのは事実であろう。しかし、伝聞を筆録した、とする書は中国の場合極めて多い。実際にそうだったのか、意図あっての自らの創作をそのように仮託したのか、そのような創作が事実譚と信じられて流布したのを、これまた事実譚と信じて筆録したのか、究明はまず不可能であろう。ともあれ、忠臣、孝子は珍しくないから、ここは義僕の逸話を作ってみようか、と考えた文人がいても不思議はない。もし果たして然りとすれば、それが筆録、あるいは口承を重ねて伝聞されているうち、兪鳴和なる御仁を経由して、田汝成のごとき一世の名士によってしかるべき文章となったことになる。更にそれが後代、清の史家によって中国の正史たる『明史』にまで採録された。こうなると甚だ現実味を帯びる。さはさりながら、だから事実あった、とは断言できないのである。

Ⅱ．民話「動物婿」と北宋の李昉撰『太平広記』巻十六神仙収録の「張老」

〔一〕

民話「動物婿」

ＡＴＵ四二五Ａ：動物婿 *The Animal as Bridegroom*

乙女が超自然的な婿と結婚する。導入部はさまざま。〔父親が娘（たち）に〕旅の土産〔を持って帰る。その一つが怪物（動物）の所有物〕。〔それを土産として家へ持ち帰る対価として〕父親が〔怪物（動物）に〕娘を〔与える、と〕約束する。あるいは娘が自分自身を〔怪物（動物）に与える、と〕約束。イェフタの誓い[76] Jephthah's vow.〔が導入となることもある〕。約束を回避しようとする試み。時時〔王女によって巨大に〕太らされた虱〔の皮を、何の皮か中てるモティーフ〕。時時夫は人身を取った神。

「父親が娘たちに旅の土産を持って帰る。その一つが怪物（動物）の所有物で、それを土産として家へ持ち帰る対価として、父親が怪物（動物）に娘を与える、と約束する」云云なる類の導入部を持つ民話を素材とした物語で日本でも有名なのは、十八世紀フランスの女流作家ルプランス＝ド・ボーモン夫人[77]（一七一一―八〇）が書いた「美女と野獣」La Bêlle et la Bête である。「美女と野獣」は彼女の最も知られている二冊の物語集のうち『子どもの雑誌』*Le Magasin des Enfants*（一七五七）に収められている。しかしながらこの物語およびその（拙さの目立つ）類話であるKHM八八「鳴きながらぴょんぴょん跳ぶ雲雀（ひばり）」Der singende springende Löweneckerchen、それからこの手の導入部で始まる民話はこの小論では取り扱わない。

他のさまざまな導入部の一つを以下に特記する。

動物の姿をした息子（蛇、ざりがに、その他。南瓜のことも）が生まれてしまう（子どものない夫妻、あるいは女が、どんな恰好（かっこう）でもいいから子どもが欲しい、[78]とせっかちに望んだから）。この息子は適齢期になると王女（大貴族の息女、大金持ちの娘、その他）を妻として娶りたい、と言い出し、幾つもの難題を成就して、結婚すること

に成功する。

〔二〕

右に特記した導入部ないしこれに類似した導入部を持つ民話、ないしこうした民話を素材として物語としたものを以下に挙げる。

① 二世紀のローマ帝国

アプレイウス「クピードとプシュケ」[79] Cupido et Psyche[80]

ある国王夫妻に三人の姫がいる。一番末の、そのあまりの美しさのため、美の女神ウェヌス（ギリシア神話のアプロディーテ）より麗しい、と評判を立てられた王女プシュケ Psyche は、諸人渇仰の的ではあるが、奇妙なことに一向良縁が無い。困惑した父王がアポロンの神託を求める。お告げにいわく。弔いの衣装を纏わせ、高山の頂に置き去りにし、人間ではない荒く猛猛しい男を婿として待ち受けさせよ、と。プシュケは素直に神託に従う。しかし、山頂の巌の上でまどろんでいると、西風（ゼフィロス）（優しい微風）によって壮麗な宮殿に運ばれ、そこで姿を見せない男性（実は愛の神クピード Cupido〈ローマ神話での名称。アモールとも。ギリシア神話のエロスに相当〉）と結婚、やはり目に見えない者たちにかしずかれ、予想に反してこの上もなく愉しい生活をこの山上の宮殿で送る。

しかし、それを妬んだ二人の姉の入れ知恵で、灯火をともして夫の姿を見てはいけない、などの夫との約束を

破ったため、夫を失う。行方知れない夫を取り戻すため、長いこと艱難辛苦の旅を重ね、夫の母であるウェヌス（実は、この乙女が自分より麗しい、と人間どもが噂するのに激怒したウェヌスが、おぞましい何かに惚れ込むよう、その矢で工作せよ、と息子クピードに命じたのだが、クピードはプシュケに惚れ込んでしまったのである）の許に行き着く。

プシュケは（姑（しゅうとめ）に当たる）女神から烈しい侮辱と虐待を加えられ、更に三つの難題を課される。①穀類の山を選り分ける（蟻の助力で達成）。②生命の泉の水を汲んで来る（ユピテル〈ギリシア神話のゼウス〉の鷲の助力で達成）。③冥界へ下り、女王プロセルピナ〈ギリシア神話のペルセポネ〉から「美」を入れた小箱をもらって来る（そこから身を投げて死ぬことによって、冥府に行こうとした河岸の塔の教えで、生きたまま冥界に赴くことができるが、帰りに好奇心に駆られ、小箱の蓋を開く。中から出たのは冥府の眠り）。二つは果たすことができたが、三つ目であやうく失敗するところを夫クピードに助けられ、ユピテルの執り成しを受けて再び喜びの暮らしに入る。

② 十五世紀の日本

「天稚彦物語」[81]（『御伽草子』の一つ「天稚彦草子」）

ある長者夫妻に三人の娘がある。大蛇がそのうちの一人を妻に求める。よこさなければ夫妻を殺す、と脅して。悲しんだ夫妻はまず長女に、大蛇の嫁になってくれ、と頼む。拒否される。次女も拒否。夫妻が一番可愛がっていた三女は、父母の命には代えがたいから、自分が大蛇にとつぐ、と承諾。

長者夫妻は大蛇の指示通り、池のほとりに十七間(けん)[82]もある大きな家を建て、ここに末娘を置いて去る。

この家が一杯になるほどの大蛇が出現。しかし、娘に向かって、怖がるな、刀を持っているなら、私の頭を斬り落とせ、と言う。娘が爪切り用の小刀で斬ると、中から直衣(のうし)[83]を着た絶世の美男子が出る。二人は唐櫃(からびつ)[84]に入って共寝。愛し合って楽しい生活を送る。欲しい物は何でも唐櫃から取り出せる。従者たちもたくさんいる。

やがて男が、自分は海龍王〔龍宮の王〕だが、空にも行くことがある、と素性を明かし、しばらく家を留守にする、七日から二十一日で帰るが、それでも帰らなければ、永久に帰って来ない、と言う。その場合、西の京[85]に「一夜ひさご[86]」を持っている女がいるから、これに報酬を与え、その蔓に縋って天まで昇れ、昇れたら、天稚御子(みこ)のいる所はどこか、と訊け、とも。

最後に、例の唐櫃は決して開いてはならない、開いたら、もうそれだけで私は帰って来られない、と禁令を言い残す。

留守中姉たちの来訪。妹が楽しく暮らしているので、内心妬ましくてたまらず、調度のたぐいをいろいろ開けに掛かる。唐櫃も開けようとする。鍵がどこにあるか分からない、と妹が拒むと、その体をくすぐって、袴の紐に括り付けてあるのを音で発見、あっさり櫃を開けてしまう。中には何も無く、煙が空に立ち昇る。

娘は二十一日待ち続けたが、夫が帰って来ないので、「一夜ひさご」で天に昇る。星たちに夫の居場所を訊き、素晴らしい御殿に住む夫に巡り合う。二人は愛の言葉を交わす。

しかし、天稚彦はこう言う。自分の父は鬼[87]なので、娘の存在を知れば、どんな仕打ちをするか分からない、と。やがて鬼である父の来訪。天稚彦はそのたびに妻を脇息(きょうそく)、扇、枕などに変身させるが、結局見つかってしまう。

父の鬼は、自分の嫁なのだから、連れて行っていろいろ用事をさせよう、と言う。

舅（しゅうと）である鬼の女主人公に対する難題。

（1）千頭の牛を朝は野に放ち、夕べには牧舎に戻す。[88]

（2）倉の米千石を別の倉に移し換える。

（3）巨大な百足（むかで）が夥しくいる倉に七日間閉じ込められる。

（4）巨大な蛇が夥しくいる倉に七日間閉じ込められる。[89]

女主人公は、いずれも夫の間接的援助で、すなわち、夫にもらった袖を「天稚御子の袖袖」と唱えて振ることで、難題を解決する。

舅の鬼は嫁いびりを諦め、二人を添わせることにする。しかし、逢う瀬は月に一度、と申し渡す。女は聞き損なって、年に一度とおっしゃいますか、と問い返してしまう。鬼は、それなら年に一度だ、と言い、苽（か）[90]を投げ付ける。そこから水が流れ出して天の川（あまがわ）となり、二人は中を隔てられてしまう。[91]

③　十七世紀のイタリア

ジャンバッティスタ・バジーレ「蛇（ロ・セルペ）」[92]（『お話の中のお話』、通称『五日物語』第二日第五話）

子どもの無い庭師夫婦。妻は子どもをひどく欲しがっている。薪の中から蛇が出て来る。子どもにしてくれ、と言う。夫婦、これを養う。どんどん成長、やがて大蛇になる。

蛇、王様の娘と結婚したい、と言う。養父が王宮に行く。

王はばかにして即刻追い払おうと交換条件に難題を出す。王宮の庭園の果実を残らず黄金に変えよ。これが成就する。次の難題。城の壁も道も宝石に変えよ。これも成就。第三の難題。王宮を黄金に変えよ。これも叶えられる。そこで王は王女に、蛇の婿になってくれ、と懇願。王女は文句を言わずに承諾する。

新婚の部屋。蛇は皮を脱ぎ捨てて美しい青年に変わる。心配して覗き見していた王女の父親が扉を破って侵入、蛇の皮を燃やしてしまう〔呪いからの早まった解放〕。青年は鳩になって窓から飛んで出てしまう。その際大怪我をしてしまう。

王女の探索行。出会った狐から王子〔蛇は元来王子だった〕の救済法を訊き出す〔その際狐は王女に騙され、殺されてしまう。王女は純真無垢では無いわけ〕。

王女は狐に教えられた通りにして、瀕死の夫を治療する。夫は王女に愛を捧げていたので、めでたし、めでたし、となる。

④　朝鮮民話「青大将婿」[93]

子どもが欲しいのに生まれない女。遂に望みが叶ったが、生まれた男の子は青大将。隣のご大家（主人は大監（てかむ）。これは正二品（しょうにほん）以上の官位を持つ人。退官してもそう呼ばれる）に三人姉妹がいる。青大将息子は、その末妹の婿になりたい、と母にせがむ。

母、大監に申し込む。大監が娘たちに縁談を取り次ぐ〔家格からしてずっと低い隣家からの縁組の申し込みを、青大将の脅迫も無いのに、なぜ大監が娘たちに伝えるのか分からない。欠落があるか〕と、長女、次女はすぐに拒否。末娘は何度訊かれても黙っている〔黙認。なぜ異類婚を首肯するのかは示されていない。強制ではな

いのに。欠落があるか〕ので、縁談が取り決められる。

婚礼の日、青大将息子は用意の水桶に入り、立派な若者の姿になる。初夜、婿は妻に蛇の抜け殻を渡し、だれにも見せるな、臭いを嗅がせるな、と固く頼む。

二人の姉が、抜け殻を見たい、と執拗にせがむ〔妹に対する激しい嫉妬から、結婚を壊したいのである〕。とうとう妹が見せると、姉たちはこれを燃やしてしまう。帰宅した婿は馬に乗って家を去る。

妻の探索行。難儀な仕事をしてやって、代わりに夫の探索に役立つ情報を知る。

畑を耕している人から。畑を全部耕してやって。

洗濯をしている人から。洗濯物を、白いのは黒く〔？〕、黒いのは白くなるまで洗濯してやって。

ヨガン（室内用便器。おまる）を磨く人から。磨いてやって。

遂に夫の家に着く。夫には二人の妾がいる。

夫の難題。妾たちと妻とに向かって。難題を解決したら妻にする、と言う。

一里以上も氷の張った所を越えて、水を一瓶運んで来る〔妻にはハンディキャップが与えられている。妾たちは滑り難いワンパルわらじを履くが、妻は普通のわらじ。ただし、却ってそのために、妾たちは上機嫌で走って転び、水を流してしまい、妻は用心してそろそろ歩き、無事に水を持ち帰る〕。[94]

虎の眉毛を取って来る。妻が成功〔虎の父親が協力してくれる〕。

虎の爪を取って来る。同上。

青大将婿は元の妻を娶り、二人で天に昇る〔青大将婿は元来天の神だったのであろう〕。

⑤　日本民話「田螺息子」[95]

主人公が動物（田螺）の形で生まれるのは、呪いではなく、田の水の神の祝福のため、つまり、水神様の申し子である、と考えられる。これを「異類婚」に分類するのは誤りで、やはり「怪物（動物）婿」型民話であろう。

子ができない爺婆夫婦。田の水神に願掛けをして、田螺でも蛙でもいいから男の子を一人授けて欲しい、と願う。水神は、元来二人には子種は無いのだが、願いに免じて田螺を授けるから大事に育てよ、と田螺を投げてくれる。

夫婦は田螺を押し頂いて帰宅。柄杓に水を張り、その中に田螺を入れ、神棚に上げて置く。男の子に変身するか、と期待するが一向ならない。

爺が町へ米を売りに行こうと、馬に米を付けていると、田螺が、自分も町へ行く、と声を掛ける〔初めて人語を発するわけである〕。爺は喜んで田螺を馬に乗せ、町の長者の許に行く。

長者の家では、水神様の申し子の田螺が来た、というので、家中の者が見物に出る。長者の美しい二人の娘たちも見る。妹の方が更に美しい。田螺は、妹娘を嫁に欲しい、と爺にせがむ。爺が諦めさせようとしても、田螺は言うことを聴かない。そして、小さな紙袋に米を一握り入れたものと一緒に自分をこの家に置いて行ってくれ、そうすれば明朝は嫁を貰って帰る、と告げる。爺はその通りにする。長者も田螺息子が珍しいので、泊まって行け、と言う。爺だけ帰る。

長者の家では田螺息子に大ご馳走をする。それらはことごとく消え失せる〔超自然的能力の示唆〕。夜になる。田螺に床を取ってやる。田螺は長者に向かい、この一握りの米は大切な物なので、寝ている間失くならないよう

守って欲しい、と頼む。長者、神棚に上げて大事に守る、と請合う。田螺、もし失くなったらどうするか、と言う。長者、何でも好きなものをやる、と約束。

田螺は夜中に起き、神棚に這い上がり、米の袋を下ろし、妹娘の部屋に忍び込み、米を噛んでそれを娘の唇に塗りつける。

朝、田螺がわいわい泣いて、米を妹娘に食われた、と非難。長者ははっきりした証拠を目の当たりにする。田螺は、約束通り代わりに妹娘を嫁にもらう、と言い、娘を馬に乗せて連れ帰る。

春祭になる。田螺は娘の髪に簪（かんざし）みたいに留めてもらって鎮守の祭見物に出かける。途中田の畦（あぜ）を渡っていると、烏（からす）が飛んで来て、田螺を突き落としてしまう。娘は、大変、夫が田に落ちた、と田の中を覗いたが、たくさんの田螺がいるので、夫はどれだか分からない。嘆き悲しんで、目を泣き腫らす。

うしろから声が掛かる。立派な青年。自分はそなたの夫の田螺だ、と名乗る。そなたの貞節のお蔭で人間の姿に戻れた、烏と見えたのも水神のお使い、と説明。

長者はこれを聞き、大層な嫁入り道具を運び込む。それから田螺息子の家にはたくさんの金が入り、田螺長者、と呼ばれるようになった。

〔三〕

動物婿とは何か

近世西欧においては、Ⅱ．の〔一〕でＡＴＵから引用したように、本来人間であったものが呪われて動物の形を取らされたものである。更に論者が付け加えれば、それが人間の女性配偶者の誠意によって救済され、元の人間に

戻る顛末が一般である。

ところが古代ギリシア、中世日本、（近世?）朝鮮、（近世?）日本においては、これまで見てきたように、天上界の住民（日本民話「田螺息子」の場合は水神の申し子）がなんらかの理由で人間の女を娶る。そして日本民話（ここでは人間の妻は一貫して誠実で夫に尽くしている）以外では、女、あるいはその姉妹が禁令を破ったので、天人は女を置いて去る。女は失踪した夫を捜し、元の鞘に収まる、という型がある。中国ではどうだろうか。その例証の一つを以下（四）で記す。

なお、古代日本の三輪山伝説（蛇体の三輪山の大神と人間の乙女との通婚）は、この型に入るのか、この型の他に東アジアの動物婿譚で忘れてならない、ある民族の起源を語る古代神話に見られる人獣婚姻の一つと考えるべきか、分からない。いずれにせよ、本当の人獣婚姻についてはこの小論では詳述を控える。

〔四〕

さて、中国には次のような話が伝えられている。

以下は『太平広記』巻十六神仙十六に収められた、仮に題して「張老」の全文である。末尾に出典として「出続玄怪録」（『続玄怪録』に出ず）とある。『続玄怪録』は夙に湮滅（いんめつ）した。

そして、これは下って明代に、大いに脚色されているが、三言の一つ『喩世明言』巻三十三「張古老種瓜娶文女」（張古老瓜を種（う）えて文女（ぶんじょ）を娶る）の素材となる。

張老者，揚州六合県園叟也。其隣有韋恕者，梁天監中，自揚州曹掾秩満而来。有長女既笄，召里中媒媼，令訪良婿。張老聞之，喜，而候媒於韋門。媼出，張老固延入，且備酒食。酒闌，謂媼曰：『聞韋氏有女将適人，求良才於媼，有之乎？』曰：『然』曰：『某誠衰邁，灌園之業，亦可衣食，幸為求之，事成厚謝。』媼大罵而去。他日又邀媼，媼曰：『叟何不自度？豈有衣冠子女肯嫁園叟耶？此家誠貧，士太夫家之敵者不少。顧叟非匹，吾安能為一盃酒，乃取辱於韋氏？』叟固曰：『強為吾一言之。言不従，即吾命也。』媼不得已，冒責而入言之。韋氏大怒，曰：『媼以我貧，軽我乃如是！且韋家焉有此事？況園叟何人，敢発此議？叟固不足責，媼何無別之甚耶？』媼曰：『誠非所宣言，為叟所逼，不得不達其意。』韋怒曰：『為吾報之，令日内得五百緡則可！』媼出，以告張老。乃曰：『諾！』未幾，車戴納於韋氏。諸韋大驚，曰：『前言戯之耳？且此翁為園叟，何以致之？吾度其必無而言之。今不移時而銭到，当如之何？』乃使人潜候其女。女亦不恨，乃曰：『此固命乎！』遂許焉。張老既取韋氏，園業不廃，負穢钁地，鬻蔬不輟：其妻躬執爨濯，了無怍色，親戚悪之，亦不能止。数年，中外之有識者，責恕曰：『君家誠貧，郷里豈無貧子弟，奈何以女妻園叟？既棄之，何不令遠去也？』他日，恕致酒，召女及張老。酒酣，微露其意。張老起曰：『所以不即去者，恐有留念。今既相厭，去亦何難？某王屋山下，有一小荘，明日且帰耳。』天将曙，来別韋氏曰：『他歳相思，可令大兄往天壇山南相訪。』遂令妻騎驢戴笠，張老策杖相随而去。絶無消息。後数年，恕念其女，以為蓬頭垢面，不可識也，令其男義方訪之。到天壇南，適遇一崑崙奴駕黄牛耕田，問曰：『此有張老家荘否？』崑崙投杖拝曰：『大郎子何久不来？』荘去此甚近，某当前引。』遂与倶東去。初上一山，山下有水，過水，連綿凡十余処，景色漸異，不与人間同。忽下一山，其水北朱戸甲第，楼閣参差，花木繁栄，煙雲鮮媚，鸞鶴孔雀，徊翔其間，歌管廖亮耳目。崑崙指曰：『此張家荘也。』韋驚駭莫測。俄而及門。門有紫衣人吏，拝引入庁中。目所未覩，異香氤氳，徧満崖谷。忽聞珠佩之声漸近，二青衣出曰：『阿郎来此！』次見十数青衣，

容色絶代，相対而行，若有引所。俄見一人，戴遠遊冠，衣朱**綃**，曳朱履，徐出門。一青衣引韋前拜，儀状偉然，容色芳嫩，細視之，乃張老也。言曰：『人世労苦、若在火中，身未清涼，愁焔又熾，而無斯須泰時。兄久客寄，何以自娛？賢妹略梳頭，即当奉見。』因揖令座。未幾，一青衣来曰：『娘子已梳頭畢。』遂引入，見妹於堂前。其堂沈香為梁，玳瑁貼門，碧玉窓，珍珠箔，階砌皆冷滑碧色，不弁其物。其妹服飾之盛，世間未見。略叙寒暄、問尊長而已，意甚鹵莽。有頃，進饌，精美芳馨，不可名状。食訖，館韋於内庁。明日方曙，張老与韋生座，忽有一青衣附耳而語，張老笑曰：『宅中有客，安得暮帰？』因曰：『小妹暫欲遊蓬莱山，賢妹亦当去。然未暮即帰，兄但憩此。』張老揖而入。俄而五雲起於庭中，鸞鳳飛翔，絲竹並作，張老及妹，各乗一鳳，余従乗鶴者十数人、漸上空中正東而去，望之已没，猶隠隠聞音楽之声。韋君在後，小青衣供侍甚謹。迨暮，稍聞笙篁之音，倏忽復到。及下於庭，張老与妻見韋，曰：『独居大寂寞！然此地神仙之府，非俗人得遊，以兄宿命，合得到此。然亦不可久居，明日当奉別耳。』及時，妹復出別兄，慇懃伝語父母而已。張老曰：『人世遐遠，不及作書。』奉金二十鎰并与故席帽，曰：『兄若無銭，可於揚州北邸売薬王老家取一千万，持此為信。』遂別，復令崑崙奴送出。却到天檀，崑崙奴拝別而去，韋自荷金而帰。其家驚訝問之，或以為神仙、或以為妖妄，不知所謂。五六年間，金尽，欲取王老銭，復疑其妄。或曰：『取爾許銭，不持一字，此帽安足信？』既而困極，其家強逼之，曰：『必不得銭，亦何傷？』乃往揚州，入北邸，而王老者、方当肄陳薬。韋前曰：『叟何姓？』曰『姓王。』韋曰：『張老令取銭一千万，持此帽為信。』王曰：『銭即実有，席帽是乎？』韋曰：『叟可験之。豈不識耶。』王老未語，有小女出青布幃中，曰：『張老常過，令縫帽頂，其時無皂線，以紅線縫之。線色手蹤皆可目験。』因取看之，果是也。遂得載銭而帰。乃信真神仙也。其家又思女，復遣義方往天壇南尋之。到即千山万水，不復有路，時逢樵人，亦無知張老荘者。悲思浩然而帰。挙家以為仙俗路殊，無相見期。又尋王老，亦去矣。後数年，義方偶遊揚州，間行北邸前，忽見張家崑崙奴

前曰：『大郎家中何如？娘子雖不得帰，如侍左右。家中事無巨細，莫不知之。』因出懐金十斤以奉，曰：『娘子令送与大郎君。阿郎与王老会飲於此酒家，大郎且座，崑崙当入報。』義方座於酒旗下，日暮不見出，乃入観之。飲者満座，座上並無二老，亦無崑崙。取金視之，乃真金也。驚嘆而帰。又以供数年之食。後不復知張老所在。

試みに読み下し文にしてみる。

張老は揚州[96]六合県の園叟[97]なり。其の隣に韋恕なる者有り。梁の天監中[98]、揚州より曹掾[99]の秩満ち[100]て来たれり。長女有りて既に笄[101]なり。里中の媒媼[102]を召して、良婿を訪わしむ。張老之を聞きて喜び、而して媒を韋門に候つ。媼の出づるに、張老固に延き入れ、且く酒食を備う。酒闌[103]にして、媼に謂いて曰く「聞くなら く韋氏に女有りて将に適人せむとし、良才を媼に求むと。之有りや」と。曰く「然り」と。曰く「某誠に衰邁[104]なれども、灌園之業[105]、亦衣食すべし。幸いに之を求めむと為す。事成れば厚く謝さむ」と。媼大いに罵りて去る。他日又媼を邀うるに、媼曰く「叟何ぞ自ら度らざるや。豈衣冠[106]の子女の園叟に嫁ぐを肯うこと有らんや。此の家誠に貧なれども、士太夫家の敵する者少なからず[107]。叟を顧みれば匹[108]に非ず。吾安んぞ一盃の酒の為に乃ち辱めを韋氏に取る能わんや」と。叟固に曰く「強ちに吾が為に之を一言せよ。言いて従わずんば、即ち吾が命なり」と。媼已むを得ず、責を冒して入りて之を言う。韋氏大いに怒りて曰く「媼我が貧なるを以て、我を軽んずること乃ち是くの如し。且つ韋家に焉此の事有らむや。況や園叟の何人なれば、敢て此の議を発するや。叟の固なるは責むるに足らず。媼何ぞ別無き[109]の甚だしきや」と。媼曰く「誠に宜しく言うべきところにあらざれども、叟の逼る所と為り、其の意を達せざるを得ざりき」と。韋怒りて曰く「吾が為に之

を報ぜよ、日内に五百緡を得さしむれば則ち可なり、と」と。媼出でて、以て張老に告ぐ。乃ち曰く「諾」と。未だ幾ばくもあらずして、車戴して韋氏に納む。諸韋大いに驚きて曰く「前言之に戯るるのみ。且つ此の翁園叟為り。何ぞ以て之を致さむ。吾其の必ず無きを度りて之を言えり。今時を移さずして銭到れり。当に之をいかんかすべきや」と。乃ち人をして潜かに其の女に候わしむ。女亦恨みずして乃ち曰く「此固より命ならむ」と。遂に許す。張老既に韋氏を取るに、園業廃さずして、穢を負い地を钁し、蔬を鬻ぎて輟まず。其の妻躬ら爨濯を執り、了として怍色無し。親戚之を悪めども、亦止むる能わず。数年、中外の有識者、恕を責めて曰く「君が家誠に貧なれども、郷里豈貧子弟無からむや。奈何ぞ女を以て園叟に妻さんや。既に之を棄つ。何ぞ遠く去らしめざるや」と。他日、恕酒を致し、女と張老を召す。酒酣にして、微かに其の意を露わす。張老起ちて曰く「即ち去らざりし所以は、留念の有るを恐れしなり。今既に相厭う、去るに亦何ぞ難からむ。某王屋山下に一小荘有り。明旦且に帰するのみ」と。天将に曙けむとするに、韋氏に来たりて別る。「他歳相い思わば、大兄をして天壇山の南に往きて相い訪わしむべし」と。遂に妻をして驢に騎りて笠を戴かしめ、張老杖を策きて相い随いて去る。絶えて消息無し。後数年、恕其の女を念い、以為らく蓬頭垢面、識るべからざらむ、と。其の男義方をして之を訪わしむ。天壇の南に到るに、適一崑崙奴の黄牛に駕して田を耕すに遇い、問いて曰く「此に張老の家荘有るや否や」と。崑崙杖を投げて拝して曰く「大郎何ぞ久しく来らざるや。荘此を去ること甚だ近し。某当に前引すべし」と。遂に与に倶に東に去る。初め一山に上るに、山下に水有り。水を過ぎるに、連綿凡そ十余処、景色漸く異なり、人間と同じからず。忽ち一山を下る、其の水北に朱戸甲第、楼閣参差、花木繁栄、煙雲鮮媚、鸞鶴孔雀、其の間を徊翔し、歌管耳目に廖亮たり。崑崙指して曰く「此れ張家荘なり」と。韋の驚駭測ること無し。俄にして門に及ぶ。門に紫衣の人吏有り、拝して庁中に引入す。舗陳の華やかなるこ

と、目の未だ覩ざるところにして、異香氤氳[136]、崖谷に徧満せり。忽ち珠佩[137]の声の漸く近づくを聞くに、二青衣[138]出でて曰く「阿郎[139]此に来たる」と。次に十数の青衣を見るに、容色絶代[140]、相い対して行き、引く所有るがごとし。俄に一人を見るに、遠遊冠[141]を戴き、朱綃[142]を衣い、朱履を曳きて、徐に門を出ず。一青衣の韋を引きて前[143]みて拝するに、儀状偉然、容色芳嫩[144]、細かに之を視れば、乃ち張老なり。言いて曰く「人世の労苦、火中に在るがごとし。身未だ清涼ならず、愁焔又熾んにして、斯く泰時を須つこと無し。兄久しく客寄するに、何ぞ以て自ら娯しまむ。賢妹略頭を梳かば、即ち当に奉見すべし」と。因りて揖して座せしむ[145]。未だ幾ばくもあらずして、一青衣来りて曰く「娘子[146]已に頭を梳き畢れり」と。遂に引入するに、妹を堂前[147]に見る。其の堂沈香[148]を梁と為し、玳瑁[149]を門に貼り、碧玉の窓、珍珠の箔[150]、階砌[151]皆冷滑碧色にして、其の物を弁ぜず。其の妹の服飾の盛んなること、世間未だ見ず。寒暄[152]を略叙し、尊長[153]を問いて已む。意甚だ鹵莽[154]なり。頃有りて、饌[155]を進むるに、精美芳馨[156]、名状すべからず。食訖り、韋を内庁[157]に館す。明日曙に方り、張老韋生と与に座す。忽ち一青衣の有りて耳に附して語るに、張老笑いて曰く「宅中客有り、安くんぞ暮帰するを得むや」と。因りて曰く「小妹暫く蓬莱山[158]に遊ばむと欲す。賢妹亦当に去るべし。然れども未だ暮れずして即ち帰らむ。兄但此に憩え」と。張老揖して入る。俄にして五雲庭中に起ち、鸞鳳飛翔し、絲竹並びに作り、張老及び妹、各一鳳に乗り、余従の鶴に乗る者十数人、漸く空中に上り、正東して去る。之を望むに已に没すれども、猶隠隠として音楽の声を聞く。韋君後に在るに、小青衣の供侍すること甚だ謹なり。暮に迫びて、稍笙篁[159]を聞くに、倏忽として復至る。庭に下るるに及び、張老と妻の韋を見て曰く「独居大いに寂寞ならむ。然れども此の地神仙の府にして、俗人の遊び得るに非ず。兄宿命を以て、合に此に到ることを得たるべし。然れども亦久しく居るべからず。

明日当に奉別せむのみ」と。時に及び、妹復出でて兄に別れ、慇懃に父母に語を伝えて已む。張老曰く「人世遐遠なり[160]。書を作すに及ばず」と。金二十鎰[161]を奉じ并びに故き席帽[162]を与えて曰く「兄若し銭無くんば、揚州北邸[163]の売薬王老の家に一千万を取るべし、此を持ちて信と為せ」と。遂に別れ、復崑崙奴をして送出せしむ。却きて天檀に到れば、崑崙奴拝別して去り、韋自ら金を荷いて帰る。其の家驚き訝り之を問い、或いは以て神仙と為し、或いは以て妖妄と為し、謂う所を知らず。五六年間にして、金尽き、王老の銭を取らむと欲すれども、復其の妄なるを疑う。或いは曰く「爾許 銭を取るに、一字をも持たず。此の帽安んぞ信に足らむや」と。既にして困しみ極まり、其の家強く之を逼りて曰く「必し銭を得ずとも、亦何ぞ傷まむ」と。乃ち揚州に往き、北邸に入るに、王老なる者、方に肆に当りて薬を陳ず[165]。韋前みて曰く「叟何れの姓なりや」と。曰く「姓は王なり」と。韋曰く「張老銭一千万を取らしむるに、此の帽を持ちて信と為せ、と」。王曰く「銭即ち実に有り。席帽は是なるや」と。韋曰く「叟之を験ずべし。豈識らざらむや」と。王老未だ語らざるに、小女の有りて青布幃中より出でて曰く「張老の常に過ぎるに[166]、帽頂を縫わしめたり。其の時皂線無く[167]、紅線を以て之を縫えり。線色手蹤皆自ずから験ずべし」と。因りて之を取りて看るに、果して是なり。遂に載銭[169]を得て帰る。乃ち真の神仙なるを信ず。其の家又女を思い、復義方を遣りて天壇の南に往きて之を尋ねしむ。到れば即ち千山万水、復路の有ることなく、時に樵人に逢うに、亦張老の荘を知ることなし。悲しみ思い浩然[170]として帰る。家を挙げて以為らく仙俗路殊なれり、相い見る期無からむと。又王老を尋ぬるに、亦去れり。後数年、義方偶揚州に遊び、北邸の前を間行するに、忽ち張家の崑崙奴を見るに前みて曰く「大郎の家中何如。娘子帰するを得ずと雖も、左右に侍るが如し。家中の事巨細無く、之を知らざるなし」と。因りて懐より金十斤[171]を出だし以て奉じて曰く「娘子送りて大郎君に与えしむ。阿郎王老と与に此の酒家に会飲す。大郎且く座せ。崑崙当に入りて報ずべし」と。

義方酒旗[172]の下に座するに、日暮にして出づるを見ず。乃ち入りて之を観る。飲む者座に満つれども、座上並びに二老無く、亦崑崙無し。金を取りて之を視るに、乃ち真金なり。驚き嘆じて帰る。又以て数年の食に供う。後復張老の在る所を知らず。

大意を取って現代日本語訳をすればこうもあろうか。

張老［張爺さん］というのは揚州六合県で野菜畑を耕している年寄りだった。其の隣に韋恕という者がいた。梁の天監年中、曹掾の任期が終わって揚州からここへ引き揚げて来たのである。その長女はもう結婚適齢期だった。そこで村の取り持ち婆さんを呼び、適当な婿を探させることにした。張老はこれを聞いて喜び、取り持ち婆さんを韋家の門のところで待ち受けた。婆さんが出て来ると、張老は強いて自分の家に招き入れ、とりあえず酒食でもてなした。酒が尽きようとする時分に、婆さんに言うには「聞くところじゃ、韋様にはお嬢さんがおありでお嫁入りするので、恰好の婿さんを探して欲しい、とあんさんに頼んだそうな。こりゃほんとかのう」。「はいな、いかにも」と答えると、言葉を継いで「わしゃまったく老いさらばえとるが、この野菜作りという仕事で、まあまあ暮らせますのじゃ。で、お嬢さんに求婚したい、と思うでな。うまく事が運んだら厚くお礼するだよ」。婆さんは大いに罵って出て行った。また別の日婆さんを待ち受けると、婆さんいわく「とっつぁまや、なんだって自分のほどちゅうものを考えないだね。お役人の家柄のお嬢さんが野菜作りの爺様と結婚するのを承知することがあろうかね。このお宅は確かに貧乏だけんど、お役人の家柄で丁度ぴったりのおうちは少なくないだよ。とっつぁまは、と考えると、月と鼈。あたしゃ一杯のお酒なんぞと引き換えに韋様に恥をかかされるのはご免

だよう」。しかし爺さんは「そこを我慢してわしのためにこの話を通しておくれ。話をして、聴いてもらえなければ、それがわしの運ちゅうものさな」と言い張る。婆さんは仕方なく、咎められるのを覚悟で韋氏の家に入って、このことを言った。韋氏大いに怒っていわく「おまえさん、わたしが貧乏なので、これほどまでに軽んじたのだね。いいかな、韋家ともあろう家柄がかようなことを承知するわけがなかろう。それにな、野菜作りの年寄り風情がなんと身の程知らずにこんな申込みをするとは。あの老人が頑固なのをとやかく言ってもせんないこと。したが、おまえさんとしたことが、どうしてこうもまあ弁えが無いのだ」と。婆さん「まったくその通りでございまして、旦那様に申し上げる筋合いじゃあございませんが、あのとっつぁまに無理強いされて、とっつぁまの気持ちをお耳に入れないわけには行かなかったんでございます」。韋は怒って「わたしのためにこう告げて欲しい。今日中に五百緡届けてくれれば承諾いたす、とな」と言った。婆さんが韋氏の家を出て、張老にこう告げると「ああ、ええとも」という返答。そして間もなく、銭を車に積んで韋氏に届けた。韋家の人びとが仰天して言うには「ああ申したのはただの冗談。それに、あの爺さんはたかが野菜作りなのだ。どうしてこんなことができよう。こちらとしては、銭の用意は絶対できまい、と思ってああ言ったのだ。そうしたら即刻銭が届けられた。さてさて、どうしたらよかろう」。そこで間接に内密で娘の意向を窺わせた。娘はこのような縁談を恨みもしないで「これはきっと運命なのでしょう」と答えた。で、とうとう承知したのである。張老は韋の息女を娶っても、野菜作りを止めず、肥やしを担い、畑を耕し、収穫した野菜を売ることを続けた。張老の妻は自身食事の支度や洗濯をし、まったく恥じる気配がなかった。親戚はこれが不愉快でならなかったが、どうすることもできなかった。何年か経つうち、一族やそれ以外の知識人たちが恕を責めて言うには「お宅は確かに貧乏だが、このあたりには他にも貧しい知識階級の子弟がいるのだ。〔そうした身分柄ちゃんと釣り合う相手ではなく〕

どうして野菜作りの老人風情に娘をめあわせたのだ。まあ、これは棄てたようなもの。どうしてどこか遠方へ去らせないのか」と。そこである日、恕は酒の支度をして、娘と張老を招待し、酒宴の真っ最中、婉曲に思惑を仄めかした。すると張老は席から立ち上がってこう言った。「結婚後さっさと立ち退きませんでしたのは、もしやお引き留めになるのでは、と思ったからですじゃ。今さように、目障りだ、とおっしゃるのなら、立ち退くのはたやすいこと。わたしは王屋山の麓に小さい別宅を持っとります。明朝あちらへ帰るだけのことです」。そうして翌日白白明けに、韋氏の許にやって来て別れを告げ、更にこう言い残した。「いずれ懐かしくお思いになるようなことがあれば、こちらのご長男を天壇山の南にお遣わしになって、わたしどもを訪ねさせてくだされ」。で、張老は妻を驢馬に乗せて笠を被らせ、自分は杖をついて一緒に去って行ったのである。その後とんとおとずれ便りは無かった。数年すると、恕は娘を偲び、きっとなりふり構わず、髪もぼうぼう、顔も垢だらけ、見分けもつかない有様だろう、と考えた。そして息子の義方に命じて張老の家を訪問させた。天壇山の南に到着すると、たまたま一人の崑崙奴が黄牛（あめうし）にまたがり、田を耕しているのに出逢ったので、「ここに張老の家があるかな」と訊くと、崑崙奴は〔牛を駆る〕杖を投げ、お辞儀をしてこう言うのだった。「若旦那様、どうしてこうも長いこといらっしゃらなかったのです。お宅はここから随分と近うございます。てまえ、ご案内つかまつりましょう」と。かくなる次第で連れだって東に向かった。まず一つ山に登ると、山の麓に川があった。川を続けさまに十数箇所渡ると、あたりの景色はだんだんにこの世と異なって来た。更に一つの山を下ると、その〔麓の〕川の北岸に朱塗りの門、豪壮な邸宅、高殿などが互いに入り交じり、花や木が生い茂り、山水の景色は鮮やかで美しく、鸞や鶴（つる）や孔雀などの素晴らしい鳥たちがその間を飛び廻り、歌や音楽が耳や目に冴えて響き渡るのだった。崑崙奴はそこを指差して「あれこそ張家の別宅でございます」と告げた。義方はびっくり仰天した。間もなく門に着

いた。門には紫の衣を纏った門衛がおり、鄭重に礼をして義方を正殿の中に入れた。敷き石の華やかさはこれまで見たこともない。珍しい香りが崖や谷中一杯に漂っている。突然真珠の帯飾りの音がだんだんこちらへ近づいて来ると、これは二人の腰元で、「旦那様がこちらへお見えでございます」と言うのだった。次に十数人の腰元が出て来たが、どれも容色が世に並ぶ者がないほど優れている。どうやらこちらを迎えに来たというあんばい。間もなく、遠遊冠を被り、朱色の薄絹の衣を纏い、朱色の履を履いた男性が、悠然と門から姿を現した。すると腰元の一人が義方の手を引いて進み、恭しくお辞儀をしたが、この男性、実に立派な風采で顔色は芳しくみずみずしい。よくよく見れば、なんと張老であった。張老は言う「俗世の労苦は火中で暮しているようなもの。その身がまだ清らかな境地に達していないのに、悩みの焔が燃え上がってはまた焼き尽くし、片時（へんし）の安らぎもありませぬのう。兄上は申さば長年他郷をさすらっておられるようなもの、俗界なんぞになにか楽しみ事がおありかな。妹御はざっと髪を整えたらすぐにお目に掛かりましょうぞ」。そうして軽く会釈すると義方を席に着かせた。さほど時も経たぬうちに、一人の腰元が来て「お嬢様はもう髪を整えられました」と告げて、義方を案内するのだった。すると妹が御殿の大広間の前に立っている。この大広間は沈香を梁とし、玳瑁を門に貼り、窓は碧玉、簾（すだれ）は珍奇な珠、石段はことごとく滑らかな碧（みどり）色で、何でできているのか分からない。妹の衣装や装身具の素晴らしさはとんと世間一般では見られないもの。妹は時候の挨拶を簡単に述べ、両親のご機嫌を伺っただけ。甚だざっとした挨拶で細かく気を配らない様子だった。しばらくして、食膳が進められたが、その料理のあんばいの良さ、芳しく香気が高いことといったらなんとも形容できなかった。食事が済むと、義方は奥殿に泊められた。その翌日の明け方、張老は義方と一緒に席に着いた。すると一人の腰元がやって来て、ひそひそと張老に耳打ちをした。張老笑って「お客様がおられるというにの、どうしたら日暮れまでに帰って来られようか」と答え、そ

れから義方に向かい、「わしの妹がちょいと蓬莱山に遊びに行こうと申して来ましてな。妹御もつきあいでゆかねばなりません。けれども日の暮れないうちに帰ってまいります。兄上はどうかここでのんびりなさっていてくだされ」と告げると、会釈して去った。すると俄に五彩の雲が庭中に湧き起り、鸞と鳳が飛び立ち、管弦の楽が演奏され、張老と妹は、それぞれ一羽の鳳に乗り、鶴に乗った供の者たちは十数人、だんだんに空中に上り、真東を指して飛び去ったのである。遙かに見送っているとそれらの姿が空の彼方に消えても、なお微かに音楽が聞こえた。韋はあとに残されたが、少女の腰元が傍らに侍ってまめやかに世話をするのだった。暮れ方になって、ちょっと笙や笛の音色が聞こえたかと思うと一行が忽ち帰って来た。庭に下りると、張老とその妻が韋を見て言うよう「独りでぽつねんとなさっていて、さぞお寂しかったでしょう。けれども、この地は神仙の棲む場所でしてな、俗世間のおひとが来ることはできませんのじゃ。兄上は前世から定められている運命がおありだったので、ここまでいらっしゃることができたのですて。しかしそれでも長居はおできになれません。明日お別れ申しあげます」。暫くすると、妹がまた姿を現して兄に別れを告げ、鄭重に両親に伝言をしたが、それだけだった。張老が言うには「俗界は遥かに遠い。手紙を書いてもせんかたないこと」と。黄金二十鎰を差し出し、更に古びた席帽を与えてこう言った。「兄上が銭に不自由なさるようなことがあったら、揚州北邸で薬屋をいとなんでいる王老の家にいらして一千万文をお受け取りになるがよろしい。これをお持ちになって証拠になされ」。こうしてとうとう別れ、再び崑崙奴に命じて送り出させた。来た方に戻って、天檀山に着くと、崑崙奴は拝を施して別れ去り、義方は自分で黄金を担いで帰ったのである。韋家では驚き怪しみ、どうしたことか、と問い質し、神仙だ、と言う者もいれば、化け物だ、と言う者もあって、結局なんだか見当もつかないのだった。五六年経つと、貰った金が尽きてしまった。王老の銭を回収したい、と思ったが、根も葉もないことではないか、と心配だっ

た。「これほどの銭を貰い受けるのに、一字の証文も無い。こんな帽子が証拠として通用するわけはない」というしだい。しかしとうとうどうしようもないまでに困窮したので、韋家では取り立てを強く迫っていわく「仮に銭を受け取れなくても、実害は無いではないか」と。そこで義方が揚州に赴き、北邸に入ると、王老なる者は店に出て薬を並べているところだった。義方は進み出て訊ねた。「お年寄りは姓を何と言われる」。答えて「姓は王と申します」。義方「張老が、銭一千万文を受け取って来い、とお言いつけになりまして。この帽子を証拠にせよ、とのことです」。王の返辞「銭のことは確かにその通りです。これがその席帽ですか」。義方いわく「どうかお調べください。さぞかし本物だとお分かりのことでしょう」と。王老がまだ言葉を継がないうちに、一人の小女が青い布の帳（とばり）の中から出て来てこう言った。「張老が以前お立ち寄りになった折、帽子のてっぺんを繕ってくれ、とおっしゃったことがございます。その時黒い糸が無くて、赤い糸で縫いましたの。糸の色も縫い方もどれも自然と証拠になりましょう」。そこで手に取って調べると、果してその通りだった。義方は結局車一輌に満載した銭を受け取って帰宅した。これで張老が真実の神仙であることを一同信じたのだった。さて韋家はその後またしても娘のことを想い、再び義方を遣わして天壇山の南麓に行かせ、娘を尋ねさせたのである。ところがそこに着いたはよいが、山また山、川また川といった有様、路などありはしない。木樵（きこり）に出会ったので訊いてみたが、張老の別宅なぞ知らなかった。悲しみ思い、後ろ髪を引かれる思いで帰って来たのであった。で、家中挙（こぞ）って、神仙界と俗界は道理が異なっているのだ、もはや会うことはないだろう、と考えた。王老を探したが、これもどこへいなくなっていた。その後数年して、義方がたまたま揚州に出掛け、北邸の前をそっと通ると、張家の崑崙奴にばったり出会った。相手は歩み寄って「若旦那様のお宅ではいかがお過ごしでいらっしゃいましょう。お嬢様はご実家へお帰りになるわけにはまいりませんが、ご両親のお傍にお仕えしているようなもの、家中の事

は全てご存じでいらっしゃいます」と言った。そして懐中から金十斤を取り出し、これを義方に捧げていわく「お嬢様がこれをてまえに託されて若旦那様に差し上げよ、ということでございます。旦那様は王老とご一緒にこの料理屋で酒を汲んでいらっしゃいます。若旦那様、ちょいとここにお坐りになっていらしてくださいまし。てまえ、これから若旦那様がここにいらっしゃることをお知らせしてまいります」。義方は酒旗のもとに坐って待ったが、日暮れになっても張老が出て来ない。そこで店に入って中の様子を見た。飲む者で一杯だったが、席上二人の老人の姿はなく、崑崙奴もいなかった。貰った黄金を取り出して検分したが、本物の黄金だった。驚き、かつ嘆いて帰った。この黄金でまた一家が数年生計を立てることができた。その後張老の消息は不明だった。

〔五〕

比較分析

引用した限りでは、「クピードとプシュケ」と「天稚彦物語」の導入部の類似、「蛇（ロ・セルペ）」と「張老」の導入部の類似に着目し得る。「青大将婿」では、引退したとはいえ高級官僚が、なんら条件も出さず、息女と青大将風情の通婚を承諾する導入部は明らかに訛伝・欠落と思われる。ここは「蛇（ロ・セルペ）」と同様、大監が激怒しつつも、どうせ不可能だろう。と考えて、莫大な金銭ないしそれに類する貴重品を婿入りの結納として要求することがなければおかしい。しかし、妻の姉たちのせいで、妻が夫に失踪され、夫を捜す艱難辛苦の旅に出るという主題は、「青大将婿」と「クピードとプシュケ」「天稚彦物語」との間に共通している。「張老」では妻の兄の義方は特に悪役ではないが、この兄がこの結婚を解消させようと禁忌を侵す類話があってもおかしくない。事実、後世そうした解釈が現

れる。〔四〕の冒頭で紹介した「張老」を素材とする明代の白話小説『喩世明言』（『古今小説』）巻三十三「張古老種瓜娶文女」[173]では、北方との戦いに従軍、郷里に引き揚げる途次、父親が「十万貫」で張公（張爺さん）に妹を「売った」と聴かされた韋義方が、村に入って見窄（みすぼ）らしい路傍の瓜売りの女が妹の文女であるのに気づき、張公を「妖人」と罵り、剣を抜いて斬ろうとする場面がある。剣は数段に折れてしまう。翌日義方が、妹を取り返す、と両親に宣言し、張公の住まいに出向くと、ただ一面の曠野となっている〔つまり、兄義方の禁忌侵犯行為――張公殺害未遂――が張夫妻の失踪を惹起したわけ〕。韋義方はひたすら夫妻を追跡、苦難の末に両人が住む「桃花荘上楽天居」に案内される。「蛇（ロ・セルペ）」で父王が蛇の皮を燃やしてしまうのは唐突で、やはり王女に二人の姉があって、これらが眉目秀麗な夫を得た妹を羨望、禁忌とされたにも拘わらず皮を燃やす、とした方が筋が通る。「田螺息子」においては、つまらぬ田螺風情が長者の娘を妻に貰いたがるモティーフこそ「蛇（ロ・セルペ）」「張老」「青大将婿」と共通だが、それ以外ははてさてどう考えたものやら。とはいえ、これとてれっきとした類話にはちがいないし、うまく整理ができないからと申して、頬被（ほおかぶ）りを決め込むわけにはまいらなんだしだい。大方のご高教を賜ればこれに過ぎた幸いはない。

この話型の粗筋としてはこうもあろうか。骨子は「クピードとプシュケ」および「天稚彦物語」である。すなわち、

天界の高貴な住人が人間の美女に恋をする。動物あるいは怪物の形を取って求婚。美女の両親を脅迫して、あるいは莫大な財宝を提供して結婚に成功。二人はしばらくの間幸せに暮らすが、美女が（姉たちに唆されるなどして）禁忌を破り、夫に失踪される。美女は失踪した夫を追って艱難辛苦の旅をしたあげく（天界で）夫と巡り会い、復縁する。

終わりに

口頭伝承では必ず起こり得る訛伝・欠落が介在するにせよ、Ⅰ、Ⅱで見る限り、これだけ類似した話が東西各地に見出される理由としては伝播しか考えられない（人間性は共通だから多元発生する可能性はある、との説には賛同いたしかねる。人間性は共通だからこそ優れておもしろい話が熱心に伝えられ受け継がれるのではあるまいか）。

Ⅰ、Ⅱを通じて仄かに感得できるのは、地中海世界と中近東、インド亜大陸、東南アジア、南中国、朝鮮半島を結ぶ遼遠な、しかしながら確実に機能した海上の道の存在である。これに対して、ユーラシア大陸の北辺部および中央部を東西に往来した遊牧民族の草原の道も東西の文化的類似性を考える場合重要であることも申し添えておこう。ユーラシア大陸の東端に連なる列島弧日本は、こうした海上の道、草原の道の外縁部にあって、上古以来これらの道が齎す文化に途切れ途切れであったにはしても接触、吸収して来た。

注

（1）ナポリ　Napoli.　長期に亘りイスパニア王国の属領両シチリア王国（ナポリ王国＋シチリア王国）の首都。近世初頭既にヨーロッパ有数の大都市だった。一五五〇年には人口二一万（ヴェネツィアは一六万、ミラノは七万）を算え、パリに次いでヨーロッパ第二の中心都市。もっとも一六五六年には大ペストの流行で人口三〇万の半ばが犠牲となった。

（2）南方熊楠（一八六七―一九四一）の指摘　南方熊楠著『南方熊楠全集』第二巻（平凡社、昭和四六）、一二一ページ以降。「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」。

（3）ＡＴＵ　ハンス＝イェルク・ウター『国際的民話の話型』Hans-Jörg Uther : *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography.* 3 Vols. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 2004.　ＡＴ、すなわち、アールネ・トンプソン『民話の話型』Antti Aarne/Stith Thompson : *The Types of the Folktale.* Suomalainen Tiedeakatemia. Academia scientiarum Fennica. Helsinki

1964. の増補改訂版。

(4)「長靴を履いたにゃんこ」*Puss in Boots*　長靴を履いた猫はペローの物語でどうやら初めて登場するようで、この話型にことさらこの名を付けるのは適切とは思えない。また、類話を見る限りこの猫殿、「にゃんこ」といった可憐なタイプとはほど遠い。「猫が主人を金持ちにする」*Cat Makes his Master Rich* くらいがまずまずか。

(5)こんな粗筋　ＡＴＵ第一巻三一六ページを論者が和訳した。

(6)ジャッカル　体長六五―一〇六センチ、尾二〇―四一センチほどで、狼に似るが耳は大きく、体は薄い金色から黄褐色で、背と尾には黒色の毛が多い。南アジア南部から南東ヨーロッパ、アフリカに分布。

(7)猿　ヨーロッパにはほとんど分布しない。英国領ジブラルタルにジブラルタル尾なし猿（マカーキ）一種が僅かに棲息するのみ。また猿は本来熱帯の動物で、日本猿は北限の猿である。

(8)頭を切り落とされると人間になる　民話には、ある動物が、奉仕の礼として斬首してくれ、と嫌がる主人公に強いる、というモティーフがあることがある。動物は実は魔法でその姿にされていた人間――王子など――だったのであって、呪いを解くには斬首してもらうのが唯一の手段、との設定。

(9)「コンスタンティーノの物語」ボルテ／ポリーフカ編『グリム兄弟の子どもと家庭のための昔話集（メルヒェン）注釈』三二五ページ以降。三三ａ「長靴を履いた牡猫」Johannes Bolte / Georg Polívka : *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm.* S.325ff. 33a. Der gestiefelte Kater.

(10)猫　gatta.　ガッタ。イタリア語で猫一般を指すが、文法上の性 gender は女性なので、牝猫でもあり得る。しかし、ストラパローラ（これは姓ではなく、綽名ないし通称であろう）が殊更牝猫と考えたのかどうかは不明。なお、牡猫はガット gatto 。パン屋の猫であるなら、穀物を狙う鼠を駆逐する重要な存在。もっとも猫自体の商品価値は無に等しいが。

(11)仙女　fatata.　不思議な力を持った女性。

(12)「ガッリウーゾ」杉山洋子・三宅忠明訳『ペンタメローネ［五日物語］』（大修館書店、一九九五）。

(13)乞食の老人　他に職業は無かったのか。篩は粉を篩ってふすまを除くためのものであろうから、粉挽きとかパン屋のように穀物を扱う仕事に従事していたのではないか。とすれば猫が存在する意味も分かる。

(14)猫　gatta.　前掲注「猫」参照。

(15)「猫先生または長靴を履いた牡猫」新倉朗子訳『完訳ペロー童話集』（岩波文庫、岩波書店、一九八四、第三刷）。

(16) maître　メートル。先生、親方、大将。これは自然性 sex も文法上の性も男性。

(17) botté　botter（長靴を履かせる）の過去分詞。

(18) 牡猫　chat.　シャ。フランス語で猫一般を指すが、文法上の性は男性なので牝猫でもあり得る。牝猫はシャット chatte 。しかし、ペローは主題を「猫先生」としているから、はっきり牡猫と設定している。

(19) こいつの肉を食べて　近世ヨーロッパの安宿や安飯屋ではしばしば猫を兎と偽って客に食べさせたらしい。フランスの文人アラン＝ルネ・ル・サージュ（一六六八―一七四七）の長編小説『ジル・ブラース』には、旅に出たばかりの初心な若者が村の旅籠で猫のシチュウを喰わされる話や、いくらか世慣れた青年たちが宿屋で兎を焼かせる際兎が本物かどうか念入りに改める記述がある。肉屋では皮を剥いだ兎を吊して売る際、猫ではない証に足先はちゃんと残したそうな。

(20) カラバ侯爵　Marquis de Carabas.　マルキ・ド・カラバ。　シャ・ラ・バンク char à banc〔二列の腰掛を備えた長大な馬車。英語 charbanc の語源〕を乗り回す偉い殿様、というイメージから考案された固有名詞か。つまり char à banc を サラバク sarabac と訛らせ、更に文字の綴り替えを行ったもの、と思われる。なお、フランス語では語末の s は無音なので、邦訳では「カラバス」ではなく「カラバ」と表記されるが、前者でも構わない。いずれにせよ、固有名詞は民話では容易に取替えが効くし、また、無くてもがなでもある。

(21) 人喰い鬼　ogre.　オーグルはフランスの超自然的悪役（英語の同綴オウガはフランス語起源。フランス語はラテン語オルクス orcus〈冥府の神〉）に由来するか）として一般的だが、ドイツ語圏では存在しない。人喰い巨人が稀にいるが、これとて他に食物があればそちらを取る。ちなみに北欧神話の巨人たちは神神に比肩する高貴なかつ強大な存在。

(22) 鬼が二十日鼠になったところをぱっくり食べてしまう　妖怪の変身術を褒めそやして、小さなものに化けさせ、これを一呑みにして退治する、というモティーフは日本の民話にもある。「三枚の護符（お札）」の結びで、寺の和尚が、小僧を追って寺まで来た山姥を、豆あるいは味噌に化けさせて食べたり、蚤に化けさせて潰したりする。関敬吾編著『日本昔話大成』（角川書店、昭和五三）六所収「十三　逃竄譚　三枚の護符」参照。

(23) ゲニウス・ロキ　genius loci.　ラテン語。土地の精、守護神。

(24) ペナテス　penates.　ラテン語。家族の安寧と繁栄の守護神たち。その名はペヌス penus（食器部屋）から由来。家家の食器部屋に祀られていた。一家の主人がその家のペナテスの祭司だった。

(25) ラレス　lares.　ラテン語。場所の神神、守護神たち。家家のラレスは先祖の霊魂で、その子孫を監督・保護するものと思われた。

(26) コーボルト　Kobold.　山の高処や鉱山の坑内に出没する山の精 Berggeist も「コーボルト」（綴りは Kobolt とも）と呼ばれる（「コバルト」Kobalt の語源。この鉱物は現在でこそ有用なことが分かっているが、往時は、銀に似ていながらそうではなく、何

の役にも立たない、とされ、山の精が鉱夫をからかう道具にしている、と解釈された）が、それとは異なり、一定の家に憑いて家事（水運び、薪作り、煮炊き、厩の汚物の掃除などなど）を手伝う、あるいは全てこなしてくれる家の精 Hausgeist。ただし、僅かでも毎日クリームなどご馳走を盛った小皿を家屋内に置いておかねばならない。これを怠るなどしてコーボルトを怒らせると家事担当者はひどい目に遭う。こうした家の精のコーボルトはそれが出没する家でかつて横死した者の亡霊だ、とする伝承もある。

(27) ハインツェルメンヒェン　Heinzelmännchen. Heinzel はドイツ語圏のありふれた男性名「ハインリヒ」Heinrich の縮小形であろう。デンマークの家の精「ニッセ」Nisse が、これまたあの国ではありふれた男性名ニールス Niels やニールセン Nielsen にその名が由来しているのと同様らしい。ただし「フーツェルマン」Huzelmann（「皺くちゃに萎びた男」。huzeln = einschrumpfen〈縮む、皺が寄る、萎びる〉）の縮小形と考え、「皺くちゃ小人」の意とする説もある。かつてケルンの市民たちの仕事を全て代わりにやってくれたハインツェルメンヒェンが有名（十九世紀ドイツの歴史画家にして著述家アウグスト・コーピッシュの譚詩『ケルンのハインツェルメンヒェンたち』August Kopisch : *Die Heinzelmännchen zu Köln* 参照。ただし、これに添えられた十九世紀のロマン派の画家テオドーア・ミントロープ Theodor Mintrop の木版画では、右往左往するちびすけたちはいずれも、とんがり頭巾に腰までの短上着、下にはぴったりした股引という中世農民風の装いだが、別に皺くちゃ顔ではない）。

(28) ブラウニー　brownie. 茶色の衣装を纏っているのでこの名がある。

(29) フォレ　follet. 小妖精。決して本質的に邪なことはしない、まずまず善意の連中。ただし、地方によっては家事など手伝わず悪戯ばかりする。

(30) 座敷童子　百姓家の奥座敷などに出現するのでこの名がある。座敷童子は、居着いた家を守護してくれるが、何か気に入らないことがあると、その家を見捨てて立ち去る、とのこと。座敷童子に去られた家は衰退し、新たに引っ越して来られた家は盛運に向かう。なお、座敷童子は生まれてすぐ間引きされた嬰児、あるいは流産した、ないし堕胎された水子の霊だ、との解釈がある。詳しくは佐々木喜善著『遠野のザシキワラシとオシラサマ』（中公文庫、中央公論新社、二〇〇七）など参照。

(31) ウェスタ　Vesta. ラテン語。ギリシア神話のヘスティアに当たる。公私の竈を司る女神。その聖火はウェスタルと呼ばれる六人の処女司祭に守られて、その神殿で燃え続けた。ローマ人の信仰によれば、彼らの国の安寧はひとえにこの聖火の保存に懸かっているのであった。

(32) 決めつけては妙になる　イタリア語では蛇はセルペ serpe で、男性名詞でも女性名詞でもよい。従って、蛇が王女と結婚したい、と言い出す『五日物語』第二日第五話「蛇 Lo serpe」――つまり主人公の蛇は男性なのである――は不自然ではないが、ドイツ

の類話では蛇が「シュランゲ」Schlange で女性名詞のため、代名詞や所有冠詞も女性を受けるものとなり、名詞の文法上の性など存在しない言語を母国語とする人間から見ると、なんだか女性が王女と結婚したがっているようで、甚だ奇妙な感じがする。しかしながらこれはどうにも仕方が無い。

(33) ヤーコプ・グリム Jacob Grimm. 一七八五―一八六三。弟の一人ヴィルヘルム・グリム Wilhelm Grimm（一七八六―一八五九）とともに著名なゲルマニスト。二人はいわゆる『グリム童話集』、正式名称『グリム兄弟の子どもと家庭のための昔話集』*Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm* の編著者である。

(34) 哩長靴（マイル）　Meilenstiefel. 一足歩けば一挙に何マイルも進める呪具。シャルル・ペローの「親指小僧（プティ・プセ）」では人喰い鬼が「七哩長靴」を履いて、逃げ出した親指小僧とその兄たちの一行を追いかけることになっている。しかしこれは長靴とは限らない。ドイツロマン派の作家アーデルバート・フォン・シャミッソ（一七八一―一八三八）の『ペーター・シュレミールの不思議な物語』（一八一四）Adelbert von Chamisso : *Peter Schlemihls wundersame Geschichte* では、片足から脱げてしまう上履き靴状の履き物である。

(35) ヤーコプ・グリムは……と類推している　Jacob Grimm : *Deutsche Mythologie*. Erster Band. S.416f. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1965.

(36) ペローの独創　同じく『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』に収められた「サンドリヨンまたは小さなガラスの上履き靴」Cendrillon ou la petite pantoufle de verre の重要な小道具「ガラスの上履き靴」はいかにも民衆の伝承に相応しい。しかし、これもペローの卓越した着想の所産ということは考えられないだろうか。

(37) 「三言」　明末の文人馮夢龍（ふうぼうりゅう）（一五七四―一六四六）編著の短編白話小説集『喩世明言（『古今小説』を改題）』『警世通言（けいせいつうげん）』『醒世恒言』を合わせた名称。

(38) 「徐老僕義憤成家」　馮夢龍編著『醒世恒言』（人民文学出版社、一九六二）七三八―七五七ページに拠る。

(39) 本話　入話（話の枕）の部分の素材は初唐の文人張鷟（ちょうさく）撰『朝野僉載（ちょうやせんさい）』巻之六「蕭頴士（しょうえいし）僕杜亮（のぼくとりょう）」。唐の開元年間の進士蕭頴士は大層学問ができたが、天性怒りっぽく、忠実な僕杜亮（しもく）を理不尽に痛めつけることがしばしばだった。ある人が杜亮に、あんたは雇われ人なんだから〔つまり、金で買われた奴隷ではないのだから〕、他に主人を見つけたら、と勧めたが、杜亮は、主人の才学に惚れ込んでいるので、辞めたくない、と応じた由。

(40) 両親の葬式代のために身売りして長年働いてきた　親の葬式を出せない不孝者にならないため、貧乏な良民が自らを富家に奴隷として売り、葬儀費用（明代の庶民なら銀五、六十両くらいか）を賄ったわけ。『初刻拍案驚奇』（後掲注「二拍」参照）第二十話

「李克讓竟達空函劉元普双生貴子（李克讓竟に空函を達し、劉元普貴子を双生す）」には、没落した士人の令嬢が亡父のため「売身葬父（身を売りて父を葬らん）」の四字を記した紙を掲げて市中で自らを売ろうとする場面がある。また、古くは、伝説上の孝子、漢の董永は父が死んだ時そうした、という話が東晋の干宝（四世紀の人）撰『搜神記』巻一に載せられている。

(41) 阿寄〔寄どん、寄やん、寄ちゃん、くらいの意〕　魯迅の小説『阿Q正伝』の主人公はまさにかように軽んじられている存在。

(42) 〔銀〕数両　中国の銀錠（明治期の日本人はこれをその形状から「馬蹄銀」と呼んだが、実際は馬蹄様以外にもいろいろ）は二十世紀前半まで流通していた。ほぼ純銀に近い良質の灰吹き銀。銀錠一個の価値は一両から五〇両までさまざまで、割って秤量貨幣として使われた。銀一両は約三七グラム。現代日本の純銀価格を仮に一グラム＝六〇円とすると、一両＝二二二〇円となる。ただし、実際の購買価値は生活形態が全く異なる時代・風土では算出できない。たとえば清代の曹霑作『紅楼夢』では百姓の劉婆さんが、銀二十両あれば優に一年過ごせる、と述懐する（農民のこと、生活必需品は、おそらくほとんどの地方では買わざるを得なかった塩、あるいは油・酢など一部を除き、最低限度はおおむね自家で賄えるわけだが）。また、貴公子ではあるがまだ少年の賈宝玉の小遣いが月二両、塾での点心代やらなにやらに、と別に年八両。

(43) 監生　明代の場合、北京（燕京）・南京（金陵）に置かれた国立学校である国子監の学生。神宗帝の万暦二〇（一五九二）年、膨大な軍費を補うため、「納粟入監」（穀物または銀を上納して監生になる）制度が公布された。このことは『警世通言』の「杜十娘怒沉百宝（杜十娘怒りて百宝を沈む）」（＝『今古奇観』の「杜十娘怒沉百宝箱」に当たる）の始まりにも記されている。科挙（官吏登用試験）の郷試（地方試験）に応じる資格のある秀才（監生を含む）の資格を持つ者は、労務奉仕（税金督促・警察業務など）の課役も幾分は減免された。つまり、官吏候補生だからである。その他、平民の集まりでは必ず上座に置かれるし、平民にはない数数の特権が賦与され、知県（県知事）のような地方官とも対等に交際できたはず。

(44) その妻子を一家として独立させた　令其妻子自己成家。奴婢として使用し続けるのに忍びず、良民にしたのである。

(45) 坊　徳行のある人や聖人などを顕彰するためにその本籍住居の門前、ないしそこへ通じる小路の入り口に建てられた鳥居型の石造建築。

(46) 趙善政　未詳。論者が『賓退録』のテクストを求めた、譚正璧編『三言両拍資料』（上海古籍出版社、一九八〇）に拠れば、『賓退録』の撰者は宋趙與時とされている。諸橋轍次編『大漢和辞典』（大修館書店）に曰く。趙與時は宋の太祖七世の孫で、宝慶の進士。確かに『賓退録』全十巻を撰しているが、これは詩を論じ、経史を校訂し、典故を弁析したもの、と。従って当たらない。一方、明の人趙善政撰『賓退録』全四巻は、閭里の風俗および旧聞奇事を録したもの、とある。ゆえにこちらに改めた。

(47) 『賓退録』巻三から全文を挙げておく　譚正璧編『三言両拍資料』五四四ページに拠る。

(48) 徐氏の昆弟産を析す　兄弟が財産分けをするのは一見公平に思われる。しかしこの場合はそうではない。末弟は長兄、次兄に比べ子だくさん（二男三女）なので、長兄、次兄は、家計を一つにしていると、亡くなった末弟の家族の面倒を見る出費が嵩み、自分たちにとっては大損だ、と考えたのである。そして更に、労働力として最も見劣りがし、かつ、老後の世話で経費が掛かるに決まっている中老の下僕とその家族を末弟の嫁に押し付け、自分たちは牛と馬を所有することにしたのは理不尽な企み。

(49) 太学の学生　唐代に制定された国立学校は首都長安にあり、国子学、太学、四門学、律学、書学、算学の六学で、全体を国子監が管理した。ここでは明代なので、「太学の学生」は単に国子監の学生＝監生を指す。前掲注「監生」参照。

(50) 田汝成　明、銭塘の人。字は叔禾。嘉靖の進士。広西右参議を授けられ、政績あり。福建提学副使に遷る。博学にして古文に巧み。なお、『阿寄伝』は『明史』二百九十七、『万斯同明史』三百九十三、『国朝献徵録』一百十三、『明書』一百三十七にもある。以上、諸橋轍次編前掲書に拠る。

(51) 原文　前掲『三言両拍資料』五四三ページ。

(52) 別　『明史』（商務印書館〈台北〉、一九六七）巻二百九十七孝義伝に拠れば「析」。

(53) 阿寄年五十余矣　『明史』「時年五十余矣」。

(54) 噫　『明史』省く。

(55) 悉　『明史』「尽」。

(56) 得銀一十二両　『明史』「得白金十二両」。

(57) 三其息　『明史』「三倍其息」。

(58) 立　『明史』省く。

(59) 又二十年，而致産数万金　『明史』「歴二十年積資巨万」。読み下しにすれば、「二十年を歴るに資巨万を積む」。

(60) 既皆輸粟為太学生　『明史』「既皆」省く。

(61) 而寡婦則阜然財雄一邑矣　「自是寡婦財雄一邑」。読み下しにすれば、「是より寡婦の財一邑に雄たり」。

(62) 頃之、阿寄病且死　「及阿寄病且死」。読み下しにすれば、「阿寄病みて死に且きに及び」。

(63) 楮　『明史』「籍」。

(64) 計　『明史』省く。

(65) 言訖而終。徐氏諸孫或疑寄私蓄者，窃啓其篋，無寸糸粒粟之儲焉　『明史』「既歿或疑其有私窃啓其篋無一金蓄」。読み下しにすれば、「既にして歿す。或いは其の私有るを疑い、窃かに其の篋を啓くに一金の蓄え無し」。

(66) 一嫗一児　『明史』「所遺一嫗一児」。
(67) 嗚呼！　以下『明史』省く。
(68) 拝　跪いてぬかずく礼。あるいは組んだ両手を挙げて上体を曲げる礼。
(69) 武　長さの単位。一歩分。三尺。
(70) 兪鳴和　未詳。浙江省厳洲府の士人か。
(71) 鳴和はまたこう言った　以下意味が通じるように訓読できない箇所がある。ご高教を戴ければ幸い。
(72) 凌濛初　明末の文人（一五八〇―一六四四）。闕王（二代目）と号した李自成（?―一六四五）の乱の鎮圧に当たり殉難した。
(73) 「二拍」　凌濛初が著述した短編白話小説集『初刻拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』を合わせた名称。
(74) 抱甕老人　江蘇省蘇州の姑蘇（現在蘇州市呉県）の人。伝は詳らかではない。明末の人であることは疑いない由。
(75) 李昉　九二五―九六年。北宋の学者・政治家。後漢、後周にも仕えた。『旧五代史』編集に加わり、また、『太平広記』（文言小説集。北宋初期までの小説七千編余りを九十二項目に分けて収録。原文を引き、出典を明記した）五百巻のほか『太平御覧』千巻（項目分類による編纂書）などの編集を主宰。
(76) イェフタの誓い　イスラエルの士師イェフタ（旧約聖書士師記一一―一四章に出る）が神ヤハヴェに、アンモン人との戦に勝利することができれば、帰宅した時家の戸口から自分を迎えに出て来るものを燔祭の生贄として捧げる、と誓ったことに因む。これは彼のたった一人の愛娘だったのである（一一章三〇―三九節）。従って、「大したものとは考えず、あることの対価として与えることを誓ったのに、それは思いも掛けぬ大切な存在だった」という誓い、との意味となる。KHM（いわゆる『グリム童話集』）三一「手なし娘」Das Mädchen ohne Hände の導入部はこれ。
(77) ルプランス＝ド・ボーモン夫人　Mme Leprince de Beaumont.　名はジャンヌ＝マリ Jeanne-Marie。ルプランスは旧姓。ド・ボーモンという貴族と結婚したのでこの姓を名乗る。ただしこの結婚は〔この男が教会も婚姻を継続すべきではないと認めた異常な放蕩者だったため〕一七四五年に「解消」するし、その後同郷人のトマ・ピション Thomas Pichon と（多分）幸せな「再婚」をし、息子三人娘三人に恵まれた。日本での紹介ではボーモン夫人で通っているが、このような経緯があるので、ルプランス＝ド・ボーモン夫人なる呼称がより適当か。
(78) どんな恰好でもいいから子どもが欲しい　「言葉の力」は強いので、それが実現したのである。これは意図せぬ呪いとなったわけ。「言葉の力」が幸運を招来する例は「祝福」である。
(79) アプレイウス「クピードとプシュケ」呉茂一訳『黄金のろば』（岩波文庫、岩波書店、昭和三一）。

(80)「クピードとプシュケ」Cupido et Psyche.　ローマ文学の傑作、紀元二世紀ローマ帝国アフリカ属州マダウロスの人ルキウス（?）・アプレイウス（一二八?―?）Lucius(?) Ap(p)leius Madaurensis が著した『黄金の驢馬』Asinus Aureus と通称される『変身譚』*Metamorphoses* の一挿話として出て来る物語で有名。

(81)「天稚彦物語」　松本隆信校注『御伽草子集』新潮日本古典集成第三四回に「天稚彦草子」として十五世紀の古い絵巻の詞書に基づいたテキストが収録されている。「天稚彦」とは「天界の皇子」の意であろう。事実後で彼自身、天に来たら、「天稚御子」はどこにいるか、と訊ねよ、と人間の妻に伝える。「天稚御子」はどうしても「天界の皇子」であるに違いない。

(82)十七間　一間は一・八メーター。従って三〇・六メーター四方にもなる。

(83)直衣　公家の平常服。

(84)唐櫃　四方に脚の付いた大型の箱。衣類や調度品を収納する。

(85)西の京　平安京の中央を走る朱雀大路の西の部分。右京。庶民が多い。

(86)「一夜ひさご」　一夜で天まで伸びる瓢箪ないし夕顔。

(87)父は鬼　天稚彦が天界の王子なら、その父は当然天帝のはず。しかし、息子の嫁が人間である、という理由で嫁を苛め抜くので、「鬼」としたものか。言うまでもないが、「クピードとプシュケ」におけるクピードの母親ウェヌスの嫁への仕打ちとその動機、天稚彦の父親の嫁への仕打ちとその動機は彼我完全に一致する。「青大将婿」では艱難辛苦のあげく夫を捜し当てた妻に当の夫自身が難題を課す。これはまことに不自然で、夫の父親（青大将婿の妻にとっては舅）ないし母親（青大将婿の妻にとっては姑）がその役割を担当すべきである。

(88)（1）千頭の牛を朝は野に放ち、夕べには牧舎に戻す　この難題は牧畜が必ずしも盛んでなかった日本では異質に思えるが……。渡来人によるモティーフの伝播か。識者のご高教を俟つ。

(89)（3）巨大な百足が夥しくいる倉に七日間閉じ込められる／（4）巨大な蛇が夥しくいる倉に七日間閉じ込められる　これらの難題は『古事記』にある、根の堅州国に赴いた大国主の神がそこの支配者である須佐の男の命の息女須勢理毗売を妻に貰い受けるために、（将来の）舅須佐の男の命から課される難題を想起させる。難題三つの内、（1）は「蛇の室で一夜を明かすこと」、（2）は「蜈蚣と蜂の室で一夜を明かすこと」である。いずれも須勢理毗売が大国主に与えた領巾（女性が頸に掛ける長い布）を振ることによって難を逃れる。

(90)苽　瓜あるいは菰。

(91)水が……中を隔てられてしまう　七夕の伝承、つまり、天の川に隔てられている織姫（織女星）と彦星（牽牛星）が年に一度旧

暦七月七日に逢う、という伝承の混入。

(92)「蛇」　杉山洋子・三宅忠明訳『ペンタメローネ［五日物語］』（大修館書店、一九九五）。

(93)朝鮮民話「青大将婿」　関敬吾監修・崔仁鶴編著『朝鮮昔話百選』（日本放送出版協会、昭和四九）。

(94)虎の父親が協力してくれる　KHM二九「黄金の毛が三本生えている悪魔」Der Teufel mit drei goldnen Haarenで、悪魔のお祖母さん（かかる存在はキリスト教神学ではありえないが、奇妙なことにドイツ語圏の民話では類例が幾つもある。はてさて……）が主人公に協力して、悪魔の頭に生えている黄金の毛を引き抜き、更に三つの謎の答えを悪魔から訊きだしてくれるモティーフに似ている。

(95)日本民話「田螺息子」　関敬吾編著『日本昔話大成』（角川書店、昭和五三年）第三巻九ページ以下。岩手県和賀郡。

(96)揚州　ここでは大きな地方行政区画の「揚州」。あとの「揚州」はその中心である城市（城壁を廻らした都市）で、長江下流左岸（北岸）にあり、現在江蘇省江都県揚州市。古から栄えた。隋の煬帝（五六九―六一八）によって南北を結ぶ大運河が開かれると、これが長江と交叉する地点に位したので更に大いに発展、繁華富裕な都市の代名詞ともなった。

(97)園叟　野菜作りの爺さん。

(98)梁の天監中　南北朝の梁（五〇二―五五六。ほぼ南中国が版図）の開祖武帝の治世天監（五〇二―一九）年間。

(99)曹掾　役所の課長補佐ほどの地位。

(100)秩　任期。

(101)笄　女子として成年に達していること。十五歳（『礼記』に拠る）。

(102)媒媼　職業的に婚姻の取り持ちをする婆さん。縁談が調えば、婚家双方から礼金を貰える。

(103)酒闌にして　酒が尽きようとする頃に。

(104)衰邁　老い衰えていること。

(105)灌園之業　野菜作りの仕事。

(106)衣冠　士大夫階級の者。

(107)敵する者　釣り合う相手。

(108)匹　釣り合う相手。

(109)別　分別。

(110)緡　一緡は銭一千文。五百緡では五十万文。前掲『紅楼夢』では賈家の門番の老女二人に酒手として奥向きから三百文が渡され

る。妾付きの女中（衣食住は主人懸かり）の手当が月一緡。では清代では銅銭何文が銀一両になるか。乾隆帝以前ではほぼ七百文が一両（これとて地方により異なった）。しかしその後銀の供給減少により、八百文、九百文と銀錠価格は上昇したとか。時代が遙かに隔たり、また全く虚構の世界であるこの「張老」の物語で金貨・銀貨・銅貨の購買価格および相互の比価を探っても無益であることは重重承知だが、ごく大雑把でもなんとか見当を付けたい。

(111) 穢（あい）　糞。ここでは「肥え」「肥やし」。
(112) 钁（かく）し　鍬で耕し。
(113) 爨濯（さんたく）　炊事洗濯。
(114) 了として　まったく。
(115) 怍色（さくしょく）　恥じらいの表情。
(116) 酒を致し　酒宴の用意をし。
(117) 酒酣（たけなわ）にして　酒盛りの最中に。
(118) 即ち　すぐに。
(119) 留念　引き留める（別れがたい）気持ち。
(120) 王屋山　河南省にある太行山南麓の景勝地。漢・魏以降、道教における「十大洞天（仙人の棲処（すみか））の首（かしら）」、「天下第一洞天」と言われた。道士の修行場として著名。
(121) 天壇山　王屋山の別称。現在「王屋山世界地質公園」の四景観区の一つの名称でもある。
(122) 蓬頭垢面（ほうとうこうめん）　髪の乱れた頭と垢だらけの顔。「蓬」はいわゆるモチグサではなくムカシヨモギ。
(123) 崑崙奴（こんろんぬ）　唐・宋代における「崑崙」とは、マレー半島、インドシナ半島、南方諸島から東アフリカに掛けての黒い肌の住民のこと。「崑崙奴」はそうした地方出身の黒い肌の下僕。しかし、これは常識的解釈に過ぎない。唐・宋の小説に登場する「崑崙奴」は神仙の棲むという伝説上の山「崑崙山」を想起させる超能力を有する下僕であることがしばしば。
(124) 黄牛　黄色い毛色の牛。上等の牛。日本では「あめうし」（飴色の牛）と訓じる。
(125) 大郎（たいろう）　若旦那様。
(126) 朱戸　朱塗りの門＝身分の高い人の邸。
(127) 甲第　立派な邸宅。
(128) 楼閣参差（さんし）　高殿（たかどの）が入り混じって建っている。

(129) 煙雲鮮媚　山水の景色が鮮やかで美しい。
(130) 鸞　伝説上の鳥。鳳凰の一種。
(131) 歌管　歌や音楽。「管」は管楽器。
(132) 廖亮　「嚠喨」であろう。「嚠喨」は管楽器の音などが冴えて響き渡るさま。
(133) 紫衣の人吏　紫衣の門衛。直訳すれば「紫色の衣装を着た下級役人（＝吏人）」。しかし、「紫衣」は本来高級官吏を指す。通常胥吏（下級役人）は黒に近く見える青衣を纏う。仙界なので俗界の常識とは合わないのか。
(134) 庁　正殿。
(135) 舗陳　敷き並べてあるもの。敷き石。
(136) 氤氳　香りが良いさま。
(137) 珠佩　真珠の帯飾り（衣の帯に結んだ飾り）。
(138) 青衣　腰元、侍女。
(139) 阿郎　旦那様、ご主人様。
(140) 絶代　世に並ぶものが無いほど優れている。
(141) 遠遊冠　昔の中国の冠の名。秦漢以降、代代しきたりとして使われていたが、元になって廃止された。
(142) 朱絪　朱色の薄絹。
(143) 儀状偉然　風采が立派で優れている。
(144) 芳嫩　芳しくみずみずしい。
(145) 揖　両手を組み合わせての挨拶。略礼（日本の会釈程度か）。
(146) 娘子　お嬢様。『太平廣記』（中華書局）では「嬢子」。
(147) 堂　御殿の大広間。
(148) 沈香　熱帯産の香木。木材と樹脂は細工用や香料として用いられる。
(149) 玳瑁　熱帯・亜熱帯に分布する海亀の一種。ここではその甲羅である貴重な鼈甲。
(150) 箔簾　。
(151) 階砌　階段。
(152) 寒暄　時候の挨拶。

(153) 尊長　目上の人。ここでは張老の妻の実家の両親。
(154) 鹵莽　細かく気を配らない。張老の妻は既に仙籍に入っているので俗縁に重きを置かないのである。
(155) 饌　食事。ご馳走。
(156) 精美芳馨　極めて吟味され、美味で、香りが芳しい。
(157) 内庁　昔の中国の建築で、第二棟にある接客・宴会・儀礼用の広間。一般に、重要な客や親しい知友を迎えるのに使う。
(158) 蓬莱山　神仙が住むという伝説上の山。蓬莱島、蓬莱仙島。渤海（現実の「渤海」は中国北部、遼東半島と山東半島の間に拡がる海域）にある、という。
(159) 笙篁　笙と笛。
(160) 遐遠　果てしなく遠い。
(161) 鎰　重さの単位。二十両あるいは二十四両。一両＝一〇匁。一匁＝三・七五グラムと換算すれば、一鎰は七五〇グラムあるいは九〇〇グラム。二十鎰では一五キロあるいは一八キロ。現代日本の純金価格を仮に一グラム＝三八〇〇円とすると、二十鎰＝五七〇〇万円あるいは六八四〇万円となる。ただし、実際の購買価値は生活形態が全く異なる時代・風土では算出できない。
(162) 席帽　昔の中国の帽子の名。蔓草を骨組としており、形状は氈（フェルト）帽に似、四隅が垂れ下がって日除けとなる。
(163) 北邸　未詳。「北郭」の意なら、城市揚州の北方の外側。
(164) 信　証拠、証明。
(165) 肆に当りて薬を陳ず　店に出て薬を並べている。
(166) 常　以前、かつて。
(167) 皂線　黒い糸。『太平廣記』（中華書局）では「皂綫」。
(168) 手蹤　縫い方。『太平廣記』（中華書局）では「手踪」。
(169) 載銭　一台の車に載せられる量の銭。
(170) 浩然　去り難いさま。
(171) 斤　重さの単位。十六両。一六〇匁。一匁＝三・七五グラムと換算すれば、一斤は六〇〇グラム。十斤では六キロ。
(172) 酒旗　酒屋が看板の代わりに掲げる旗。
(173) 「張古老種瓜娶文女」以下の粗筋は、馮夢龍編撰・徐文助校注『喩世明言』（三民書局股份有限公司、二〇〇三初版二刷）五五〇―五五三ページに拠る。

結びに一言。

この小論は、新田春夫教授定年退任記念号に寄稿するため、平成二二（二〇一〇）年二月二十七日に論者が行った武蔵大学最終講義の内容を基に大幅に加筆訂正したものである。多年ご交誼を忝くした親愛なる同僚新田さんに謹んでこの拙文を捧げる。

また東京大学大学院中国語中国文学博士課程後期に在籍の長女鈴木弥生の力添えに深く感謝する。こんな筋の物語が中国にないか、との論者の質問に応えて、弥生が、言下に、これはどうか、と二つの白話小説とその素材を教えてくれなければ、小論の根幹を成す中国の類話との比較そのものがそもそも成立しなかったし、弥生による中国関係参考資料の提供がなければ研究論文の体裁をも作れなかった。ただし、あり得べき誤謬を含めて、分析、解釈、文辞の全てが論者一個の責任に帰することは申すまでもない。